

平成27年度首都大学東京 学位申請論文

# ギデنزの構造化理論に関する批判的再検討

2017年1月10日

首都大学東京大学院 人文社会研究科  
社会行動学専攻 社会学教室 博士前期課程  
劉倬帆  
15858110

## 要旨

パーソンズ以降、社会理論にとって、いくつかの解決しなければならない問題がある、その中に、「社会とは何」という存在論的な問いと、「社会学はどのような学問なのか」という学問位置づけの問い、この二つが極めて基礎的かつ重大な問題であろう。この二つの問いに対して、イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズが既存の社会理論を批判し、そのうえで、構造化理論を提出することによって、新たな回答と方向を提示した。

しかし、日本におけるギデンズの構造化理論の理解について、ギデンズの科学的思想への関心が不十分、ギデンズの構造化理論の社会学または社会科学の原論の意義に対する認識が不十分、さらに、ギデンズが扱った個々の論点から出発し、それについて断片的に議論する研究が多い、ギデンズ思想そのものに対する認識が不十分、こうした問題を指摘しなければならない。それゆえ、ギデンズがこの二つの問題に対してどのように回答したか、既存の社会理論をどのように乗り越えたかということも認識できていないままである。

本論文の課題は基本的にギデンズの構造化理論を十全に理解することに置かれる。第一章から、「デュルケーム・パーソンズによって定式化された社会学に対する科学的批判」の中で、ギデンズの自然主義批判を議論するとともに、「社会学はどのような学問なのか」という問いに対してギデンズの回答を確認する。結論から言えば、ギデンズが「実践によって出来上がった相互理解」を社会的世界の基盤とし、そうした基盤が存在するからこそ、社会的世界が自然的世界から区別することができると主張している。また、こうした「実践によって出来上がった相互理解」は行為者のみならず社会学者にも利用されているという点から、社会科学研究は主体—主体との関係であり、自然科学のような主体—客体との関係とは区別することもできる。こうした二重の解釈学の原理によって、社会科学は自然科学の実証主義を素朴に従うことができなく、批判主義的な学問性格を持つのである。すなわち、社会学は規律を探り出す学問ではなく、さまざまなこと批判することによって、より良い社会を作り出す学問なのである。具体的に言えば、ギデンズは「実践によって出来上がった相互理解」の中の命題化された部分を常識と名付け、それについて批判的評価は可能であると主張している。批判主義的社会学の批判する対象が、こうした常識なのである(イデオロギー批判も常識批判へ属する)。また、ギデンズが認知言語学者ライコフとかなり近い立場から、機能主義の認知的基盤は有機体メタファーであることを指摘し、すなわち、有機体メタファーなしには社会を実体として認識することがあり得ない、機能主義者は口にしながらも暗に有機体メタファーに導かれている、その認知的プロセスには正当性がない、ということ

ギデنز是指摘している。こうしたことによって、ギデنز は機能主義の立場をなくさせたのである。「二元論に対する存在論的批判」の中で、マルクスの実践概念から考察することによって、ギデنزの二元論に対する批判がマルクスから引き継いだ実践概念を中心として展開しているということを明らかにし、「社会とは何」という問いに対して、ギデنزの回答を確認する。結論から言えば、ギデنزの「社会観」は以下のよう なものである: 主体と客体両方とも実践の中で形成かつ再形成され、一刻も止まること なくずっと実践の中で変化していくものである。また、「人間行為者は何もないところか ら寄り集まって融合もしくは結合し、新しい統一体を形成するのではない。」 (Giddens, 1984=2015:206) こうした実践は決して個人の实践ではなく、複数の行為者が 組成する集団の实践なのである。行為者らは実践を通して自然的世界を認識し、改 造していくのである。この意味で、実践は時間の厚さと空間の幅を持った流れのよう なものにほかならない。こうした実践の流れが歴史なのである。つまり、社会とは、決して 社会実在論者や社会名目論者が言うような静止的なものではなく、時間—空間にお ける、絶え間もなく動き出していく主体らと主体らによって対象化され変化されていく客 体の運動的総合なのである。

こうしたギデنزの基本的な立場を確認した上で、第二章から構造化理論の基本的 構成を議論し、そして、そのすべてを踏まえて、第三章から構造化理論における構 造概念の間主体性、創発性、さらに構造と主体との間に存在する視角転換を議論し、 構造化理論の重大な問題点を明らかにする。すなわち、実践の原理から言えば、構 造化理論における構造が実践によって内容が充実される。同じ「客体」であってもそれ に加えた実践が異なるのであれば、諸行為者の記憶の痕跡として存在している構造 が必ず異なる。つまり、構造は社会中に通用するものである限り、特定の個人の实践 へ依存することができなく、集団の实践へ依存するのである。特定の個人の記憶の痕 跡へ依存することができなく、社会的システムの諸メンバーの記憶の痕跡の全体へ依 存するのである。つまり、構造化理論における構造概念は間主体的な概念に他ならな い。こうした間主観的な構造は、過去において通用してきたが、未来においては必ず しも通用するわけではない。その意味で、構造概念がそもそも未来における通用可能 性を保証しているゆえに、かなり不純粋なものである。その意味においてのみ、構造化 理論における構造が創発性を持つのである。そして、こうした間主体的な本質を解明 することによって、構造化理論における主体論と構造論の間には隠されている視角転 換が存在しており、間主体的な理論が欠けているという問題点を明らかにする。その 延長線上に、本論文は間主体的な理論と構造概念の時効性を導入することと呼んで おり、そうすることによって、構造化理論がより細緻化できると主張する。

## Abstract

Since Parsons, there have been some questions of social theory that need to be solved, of which the ontological question: "What is a society?" and the academic positioning question: "What kind of discipline is sociology?" are the most fundamental and critical questions. In response to these two questions, British sociologist Anthony Giddens criticizes the existing social theory and subsequently presented a new answer and direction in his structuration theory.

However, the understanding of Giddens' structuration theory in Japan are insufficient in terms of their interest in Giddens' scientific thought, and their perception of the significance of the social science and even the original theory of social science behind Giddens' structuration theory. There are many studies that are based on individual arguments from Giddens. They are researched and discussed in a fragmented way. However, it is necessary to point out that the recognition of Giddens' idea itself is insufficient. Therefore, we have not yet realized that how does Giddens respond to these two questions and overcame the existing social theory.

The purpose of this paper is to fully understand Giddens' structuration theory. From the first chapter, we confirmed Giddens's response against the question "What kind of discipline is sociology?" through criticizing scientifically the sociology defined by Durkheim-Parsons, and discussing the criticism of Giddens' naturalism at the meantime. In conclusion, Giddens argues that "mutual understanding completed by praxis" is the foundation of the social world. Because of the existence of such foundation, Giddens believes that the social world can be distinguished from the natural world, and such foundation is used not only by agents but also by sociologists. From this point of view, social science, which is about relationship between subjects and objects, can be distinguished from natural science, which is about relationship between subjects and objects.

According to the principle of double hermeneutics, social science is a discipline that has a critical character, and should not blindly follow the positivism of natural science. In other words, sociology is not a discipline of discovering patterns, rather it is a discipline that builds a better society through criticizing. Specifically, Giddens names the propositional part of "mutual understanding prepared by praxis" as common sense, and the common sense is what we can criticize. Common sense is an object criticized by criticism sociology (criticism of ideology also belongs to criticism of common sense). In addition, from the standpoint of George Lakoff, who is a cognitive linguist, Giddens points out that the cognitive base of functionalism is an organism metaphor, that is,

without such organism metaphor, it is impossible for society to be recognized as an entity. Giddens points out that this cognitive process, which is implicitly led by the organism metaphor without functionalism by the functionalist, is not valid. Through such criticism, Giddens removed the base of functionalism. In "Dissentive criticism of dualism", by looking into the praxis concept of Marx, it is revealed that Giddens develops the concept of praxis based on the criticism of dualism from Marx, and confirms the answer of Giddens against "What is a society?". In conclusion, Giddens' s "social outlook" is as follows: Both subjects and objects are formed and reformed in praxis, and they are changing in praxis constantly without stopping. Such praxis is never an individual praxis, it is the praxis of a group composed by multiple agents. The agents recognize and remodel the natural world through praxis. In this sense, praxis is like a flow with time and space width. The flow of such praxis is history. In other words, society is not a stationary thing as proposed by social realists or social nominees, but a sum of movements of subjects and objects that are changed by subjects in time-space. After we confirmed such fundamental position of Giddens, we start discussion of the basic composition of structuration theory in the second chapter. Based on those discussions, the third chapter focuses on the inter-subjectivity, the emergence, the perspectives transformation between the agents and structures in the structuration theory in order to discuss important problems of structuration theory. In other words, from the principle of praxis, the structure of the structuration theory is enriched by praxis. If the praxis added to subjects are different, even if they are the same subjects, the structure of agents' memory traces will also be different. In other words, as long as the structure is generic and can be applied to society, it depends on group praxis instead of relying on the praxis of a specific individual. It depends entirely on the traces of memory of members of the social system rather than rely on traces of memory of a particular individual. In other words, the structure concept of structuration theory is nothing but an inter-subjectivity concept. In the meantime, the inter-subjectivity structure has been applied in the past, but it is not necessarily applicable in the future. In that sense, it is quite impure that the structure concept guarantees the usability from the beginning. Only in that sense, the structure in the structuration theory has emergence. In the meantime, by clarifying the principle of the inter-subjectivity, there is a hidden perspectives transformation between the subject theory and the structure theory in the structuration theory, and the problem is the lack of inter-subject theory. On the extension line, this paper proposes the introduction of the effectiveness of inter-subject theory and time-limitations of the structure, and argues that by doing so, the structuration theory can be refined.

## 謝辞

本論文を構成するにあたり、宮本孝二教授、指導教官の左古輝人準教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。

2016 年 12 月 末日

劉倬帆

首都大学東京 人文科学研究科  
社会行動学専攻 社会学教室

# ギデنزの構造化理論に関する批判的再検討

## 目次

要旨.....	2
Abstract.....	4
謝辞.....	6
序章 問題の所在.....	8
第1節 本論文の課題 .....	8
第2節 本論文の構成 .....	11
第1章 既存の社会理論に関する先行研究.....	13
第1節 デュルケーム、パーソンズによる社会学に対する科学的批判.....	13
第2節 二元論に対する存在論的批判.....	29
第2章 構造化理論の基本的構成.....	41
第1節 構造化理論における構造 .....	41
第2節 構造化理論における主体 .....	46
第3節 構造化理論における制度分析.....	57
第4節 構造化理論における社会的システム.....	62
おわりに 社会科学原論としての意義 .....	68
第3章 構造化理論の問題点と可能性 .....	70
第1節 構造化理論の問題点:創発性問題について .....	70
第2節 構造化理論の可能性:構造化理論の彫琢に向けて.....	80
おわりに .....	84

## 参考文献

## 序章 問題の所在

### 第1節 本論文の課題

第二次世界大戦以降、正統的合意(orthodox consensus)ともいえるパーソンズ流の社会学はまぎれなく支配的な地位を確立できていた。勿論、支配的な地位とはいえ、パーソンズ流の社会学は階級分化やコンフリクトなどの概念をよく取り組んでいないという声も上がっていたが、正統的合意そのものは動揺されることはなかった。しかし、1960年代後半から1970年代前半にかけて、社会学分野の中で、大きな変化が起こった。それは、この正統的合意が崩壊してしまったからである。

そして、それ以来、機能主義、構造主義、コンフリクト学派、シンボリック相互作用論、現象学社会学、エスノメソドロジーなどといったさまざまな理論的視座が共存する局面となったのである。

こういった状況について、社会学者のなかには、さまざまな反応が見られた。例えば、かなり前から、社会学分野において、質的研究や量的研究などの具体的研究は、ある程度理論から離脱して独走している状況になったのである。そしてそれゆえにこれらの具体的研究に従事し専念する社会学者らにとっては、理論的論争はそれほど重要な問題ではなかった。つまり、理論的論争を参与しない——というのが一つの立場である。また、理論研究を中心とする社会学者の中でも、(例えばR・K・マートン)理論的視座の多極的構造を問題視どころか、逆に肯定するのである。

さらに、多様な現実の多様性は理論の多様性を保証しており、特定の理論を支持することは他の観点を排除し独裁的な立場にすぎないと主張する社会学者さえいた。

しかし、A・ギデنزに言わせれば、「…前略…理論的立場の多様性を故意に奨励するしか道はない、ということにはならない。異なる理論的枠組みについて、その生産性や精密度という点から優劣をつけることは可能である。さらに、理論は常に、ある程度は、経験的調査によって生み出された観察によって評価されうるものである。(Giddens,1987=1998:50)」

つまり、理論的視座の多極的構造について、そもそも理論の独裁を避けよう云々の価値観的な問題ではない、社会学を一つの学問として確立したければ、その対象の客観性(外部の世界の人間の意志や見方によらない性質)を受け入れなければならない、すなわち、社会学の研究対象になる社会的現実をちゃんと見ているかどうかの問題であった。

そして、19世紀または20世紀前半の社会理論の中で、その後の経験的調査によって反証されている、あるいは今の視角で見れば科学性が欠けているところが多

かった。こういった現状を徹底的に見直すのが紛れもなく一つ重要な課題であろう。

さらに、ギデنزによれば、さまざまな理論的視座が共存しているとはいえ、それらの理論的視座は大きく二つに分けられる、すなわち人間主体を社会的環境などの客観的なものによって決定されるものとしてとらえ、理論の中心を人間主体を決定する社会的環境などの客観的なものに置かれる客観主義的な理論と人間主体を自らの意思や自分にとっての意味などによって行為するものとしてとらえ、理論の中心を意思や意味さらには意思や意味を伝達する言語に置かれる主観主義的な理論である。前者の代表は構造主義や機能主義などであり、後者の代表は理解社会学や現象学社会学などである。そして、こういった二元対立は人文社会分野における他のさまざまな二元対立と何らかの形で暗に関連している、例えばデュルタイの精神科学とコントの実証主義との対立、人文科学のパラダイムと自然科学のパラダイムとの対立、社会実在論と社会名目論との対立、主意主義と決定論との対立、構造と主体との対立などが挙げられる。現代社会理論にとって、こういった二元対立を解決するのも重要な課題の一つであろう。

パーソンズ以降の社会理論のなかで、A・ギデنزの構造化理論の重大な意義は以上の問題提起から理解することができる、すなわち、構造化理論の基本的に解決しようとしているのは、社会学または社会科学の科学性問題、経験的調査に基づく理論的更新、さまざまな理論的視座の分裂すなわち二元対立問題である。そして、こういった問題はいくつかの新たな問題をもたらしている：まず、社会学または社会科学の科学性問題について、デュルケーム、パーソンズによって定式化された社会学または社会科学の学問としての位置づけ、課題設定、研究方法、期待される結果など全て批判し、またそれを科学性、現実性、生産性のある新な学問に改造しなければならない。

次に、経験的調査に基づく理論的更新について、社会学分野のみならず、さまざまな分野の成果を積極的に吸収し、それに基づいて既存の社会理論を反省し、新たな社会理論を構築することが要請される。

最後に、さまざまな理論的視座の分裂すなわち二元対立問題について、社会的現実にして二元対立の問題を根本的に見直し、新たな社会学原論または社会科学原論を構築しなければならない。

これらの重要な問題に取り組んだのは、A・ギデنزの構造化理論であった。

ギデنزの構造化理論が発表されて以来、世界中かなりの関心をよんでいるのである。日本においても、ギデنزの主要な著作のほとんどは翻訳されており、ギデنزの思想に関する論文や著作もかなりの量を蓄積したのである。しかしながら、日本の社会学分野において、ギデنزに関する研究について、以下に示す3つの問題があるのである。

第一に、ギデンズの科学的思想への関心が不十分という点である。ギデンズの科学的思想を理解するのに3つの重要な意義がある。まず、社会学が創立されて以来、コントからデュルケームを経てパーソンズに至って、自然主義と機能主義を基本的前提として確立した。パーソンズの時代において、こういった前提は社会学の正統的合意として世界中に受け入れられており、社会学のアイデンティティだと見なされていた。しかしこういった正統的合意には科学性が欠けている部分が多く、それを根本的に批判するのに、科学的議論しなければならない。すなわち、正統的合意によって定式化された社会学の位置づけ、問題設定、研究方法、期待される結果などの一連の問題を根本的に見直すために、科学的思想が重要である。次に、正統的合意が崩壊して以来、様々な理論的視座が登場したが、それらの理論的視座の有効性や生産性などについて評価するために、科学性も一つ重要な基準である。最後に、ギデンズの構造化理論は基本的に既存の社会理論を批判した上で構築された新たな存在論的な理論であるゆえに、社会学はどのような学問なのかについて、すなわち社会学の学問としての位置づけ、問題設定、研究方法、期待される結果など一連の問題について、構造化理論の中で再定式化しなければならない。つまり構造化理論を社会学または社会科学原論としての科学性の問題である。

ギデンズ自身も社会学または社会科学にとって科学性問題の重要性をよく意識している。1997年のインタビューの中で、ギデンズは自分の最初の課題を「社会思想の歴史、特に十九世紀から二十世紀前半の社会思想史の再解釈」、「社会科学の論理と方法の再構築」、「それに近現代の諸制度が出現していく過程の分析」と述べた。1976年の「社会学方法の新しい基準」の第四章はほとんど科学性についての議論であった。他の著作の中でも社会学または社会科学の科学性や位置づけなどの議論がしばしば現れる。つまり、ギデンズの思想を理解するのに、科学的視角は欠けるべきではないのであろう。

第二に、ギデンズの構造化理論の社会学または社会科学の原論の意義に対する認識が十分ではない。この問題はギデンズの実践概念の理解と関係している。ギデンズの構造化理論の中で、一番核心的な概念は行為者や構造などではない、実践なのである。この実践概念を十分理解できないかぎり、構造化理論はどのようなにして二元論を乗り越えたのか、構造化理論は如何に存在論として確立できたのかも理解できないのである。しかし日本の社会学分野において、実践概念は構造化理論の中心を据えているという点について十分理解されていない、そして、今日においても、社会に対する基本的な観点は基本的に社会実在論、社会名目論、形式社会学ぐらいにすぎなかった。

第三に、ギデンズが扱った個々の論点から出発し、それについて断片的に議論する研究が多い、ギデンズの思想そのものに対する認識が十分ではない。この問題について、ギデンズの自身もこの傾向を助長したかもしれない。というのも、ギ

デングの思想は構造化理論の提出によって体系化したとはいえ、デングの著作の中で、個々の論点はかなり独立なもので、必ずしも一つの体系として理解されるわけではない。

つまり、デングは社会学以外に現象学、実存主義、構造主義さらにポスト構造主義、解釈学、言語哲学、科学哲学、心理学、人類学、歴史学など数多くの分野の成果を積極的に吸収し、その上で構築された社会科学の存在論は構造化理論なのである、しかしそれゆえに、構造化理論は一般性が高いが体系化の程度が低いという特徴がある。それは構造化理論の内在的統一性が低いということの意味するわけではない、個々の研究者は自分の問題意識と合わせてデングの思想の一部だけを切り取ってそれについて議論することが容易になるということである。勿論、断片的な研究であってもこれらの研究はそれなりの価値があるに違いない、しかしながら、デングの思想を体系的に理解しないかぎり、個々の論点を把握するのに誤謬が生じる可能性も高くなる、ということも現実的な問題である。

以上の理由から、本論文では、デングの構造化理論を正確に理解するため、その基本的概念図式を描くことを目的としている。その際に、とりわけ日本においてデングの構造化理論を理解する際に生じた問題点を克服し、その延長線上に、構造化理論の問題点と可能性を議論する。

## 第2節 本論文の構成

本論文は3章(序論を含む)によって構成される。

第1章では、既存の社会理論に対する批判の中で、デングがいかにデュルケーム・パーソンズによって定式化された社会学を批判したのか、社会学はどのような学問であるべきなのか、デングの科学的思想からデングの立場を明らかにする。また、二元論に対する存在論的な批判の中で、マルクスの実践概念の含意と、構造化理論におけるマルクスの実践概念の受容を考察することで、デングは如何に二元論を乗り越えたか、デングが提示した社会の存在論的観点はどのようなものかを明らかにする。

第2章では、構造化理論の基本的構成のなかで、構造化理論の構造、主体、制度分析、社会的システムを中心として考察し、構造化理論の基本的図式を把握する。それとともに、デングの構造化理論がいかにマルクスを超越したか、構造化理論の意義も、明らかになるのである。

そして第3章では、これまでの議論のすべてを踏まえて、デングの構造化理論における構造の創発性問題を議論し、構造化理論には重大な欠陥があることを明らかにする。また、その欠陥に対して、解決しうる道を検討し、構造化理論の未来を展望する。



## 第1章 既存の社会理論に関する先行研究

ギデنزの構造化理論に関する既存の社会理論の伝統は4つ——構造主義、機能主義、マルクス主義、理解社会学に区分することができる。しかしながら、この4つの理論伝統を議論するために、それと関連する分野も触れなければならない。つまり、構造主義と関連する言語学、記号学、心理学など、理解社会学と関連する現象学、行動哲学などもギデنزが扱っているのである。しかし、例えば機能主義のような極めて盛んでいる伝統は、さまざまな領域で応用され、変容されている。具体的に言えば、ラドクリフ・ブラウンやマリノフスキーの「人類学機能主義」、パーソンズの「規範機能主義」、マートンの「葛藤機能主義」、ルーマンの「等価機能主義」、アレクサンダーの「ネオ機能主義」などがある。それゆえに、機能主義の諸変種を含みその全てに議論を加えることはほぼ不可能だと言えよう。こうした状況に対して、ギデنزの議論は二つの線に分けて展開されている。つまり、第一に、その理論伝統の基盤となる基礎的前提から議論するという線と、第二、その理論伝統の代表的な人物の説から議論するという線である。両方ともギデنزの思想を理解するのに重要なものであるが、課題に合わせて、本論文は「その理論伝統の基盤となる前提から議論するという線」を主として展開するのである。そして、ギデنزによるデュルケーム・パーソンズによって定式化された社会学または社会科学への科学的批判、既存の社会理論の諸伝統への批判的評価、構造化理論のより一般的な前提を確認することができる。

### 第1節 デュルケーム・パーソンズによって定式化された社会学に対する科学的批判

第二次世界大戦から一時的に正統的合意、社会学のアイデンティティだとななされていたパーソンズ流の社会学について、言うまでもなくその基本的前提は T・パーソンズによって提出されている。1937 年の「社会行為の構造」の中で、パーソンズはデュルケーム、ヴェーバー、パレートの成果を受け入れ、精錬された形の機能主義と、自然主義的諸前提を結びつき、社会理論の「あるべき形」を示した。その後何十年間、パーソンズの社会理論はコンフリクトや社会変遷などの概念とうまく取り組んでいない、システム統合の次元は重視されていないなどのさまざまな批判を受けていたにもかかわらず、その前提となる機能主義と自然主義そのものは動揺しなかった。

こういった正統的合意はまた別の形でシンボリック相互作用論の伝統と結びついている。パーソンズ自身は G・H・ミードの業績をまともに受け取れていないが、ミードの思想自身の問題——「I」の理論の欠如はシンボリック相互作用論を正統的合

意へ統合される契機となった、「ミードの社会哲学は、この点が非常に重要であるが、再帰性をめぐって、つまり、主我の《組成的》活動に重点は置かれていない。ミードが専心没頭していったのはむしろ「社会的自己」であり、「社会的自己」の強調は、ミードのほとんどの信奉者の著書でさらに一層顕著になっている。したがって、「社会的自己」を「社会的に決定された自己」と安易に解釈し直すことが可能であるため、このようなミードの理論家の様式がおそらくもたらすことができた重要な影響力の多くは、失われてしまった。それ以来、象徴的相互作用論と機能主義の差異はさほど際立っていない。このことは、なぜ象徴的相互作用論と機能主義が米国の社会理論で合体できたのかを説明している。米国の社会理論では——ミードからゴッフマンに至るまで、制度と制度的変化に関する理論を欠いてきた——象徴的相互作用論と機能主義との区別は、総じて「ミクロ社会学」と「マクロ社会学」の単なる役割分担とみなされている。(Giddens,1993=2000:51)」つまり、ある意味ではシンボリック相互作用論も正統的合意の一部になっていたのである。

ギデنزの著作の中で、既存の社会理論の内に機能主義を批判の重点に置かれるのもこのためである——自然主義と機能主義的考えはあまりにも受け入れられ、この正統的合意なしには社会学という学問さえ語られなかったのである。そして、この意味で、「この正統的合意をどのように批判するか」という問題は「社会学はどのような学問であるべきなのか」という問題と直接に関連しているのである。したがって、ギデنز「社会理論の最前線」において以下のように述べている。

「正統派の合意は、福祉国家における資本主義のイデオロギー的反映にすぎないとして、無視したり忘れ去るべきではない。もしその合意を捨て去る正当化があるならば、その合意の弱点をはっきり見定めるべきである。私見によれば、その弱点を指摘することはそれほど困難ではない。また私は、かつての合意の欠点を診断することにより、見落とされていた問題を理論化する——理論的な分析の焦点とする——必要性を指摘してみたい。」(Giddens,1979=1989:262)

そして、1979 年の「社会理論の最前線」の最後の章「現代社会理論の展望」の中で、ギデنز「正統的合意について、以下の 5 つの点から批判を展開した。

第1に、社会学の主潮流が、対自然科学との関連で、社会学の起源について誤った自己解釈を取り入れたことである。つまり、パーソンズ流の社会学は社会学をコント・デュルケーム・パーソンズという線を中心として発展してきた学問だと解釈し、それに多かれ少なかれ、社会学は自然科学とはいくら違ったにしてもその基本的な論理的形式は同一であるという自然主義的考えを受け入れている。また、この観点によれば、社会学分野において、専門家集団によって合意を得ている厳密に定式された法則がまだ発見されていないという現状も、社会学は未熟な学問である証拠にほかならない。

こういった観点に対して、ギデنزの一番有名な反論は「二重の解釈学」であろう。二重の解釈学というのは、簡単に言えば、

「社会学は、自然科学と異なり、「研究領域」に対して、主体—客体の関係ではなく、主体—主体の関係にある。社会学は先行した解釈がなされている世界を問題にしており、この先行した解釈がなされる世界では、能動的主体が創り出す意味は、その世界の現実の組成ないし生産の中に実際に入り込んでいく。したがって、社会学理論の構築は、ほかに類例のない二重の解釈学を必然的にともなう。終わりに言えば、一般化の論理様式は、自然科学の法則の論理様式と、非常に重要な点ではっきりくべつできる。(Giddens,1993=2000:250)」

つまり、パーソンズ流の社会学が「予言の自己成就」や「自己否定」を問題視する立場と違って、ギデنزには、こうした研究者と研究対象の間に相互的に影響を与える仕組みを社会学の根本的性格として理解しなければならないと主張する。したがって、自然科学のような厳密に定式された法則が発見されていないのも当たり前のことで、社会学の未熟の証拠にはならないのである。

「社会科学のモデルを求めてすぐさま自然科学へと駆け寄る者たちの目には、間違いなく社会科学は遠くかけ離れた二番煎じと映っている。社会科学は認識上も実践上も自然科学よりもはるかに劣った存在に映るのである。だが、社会科学がもはや自然科学の複製などではなく、いくつかの点で全て異なった試みであることを受け入れるならば、社会科学の偉業や影響について全く別の捉え方をしても許されるであろう。社会学には普遍的な法則など存在しないし、今後も存在することは決してない。それは、何よりもまず、経験的検証と妥当性確認の方法に何処か欠陥があるからではない。そうではなくて、私がすでに指摘したように、人間の社会的行動についての一般命題に含まれる因果的条件が、行為者が自らの行為の環境についてもつ知識(あるいは確信)それ自体と関係づけられうると、本質的に不安定になるからなのである。マートンらが論じたいわゆる「自己成就的予言」は特殊事例であって、それよりもはるかに一般的な現象が社会科学には存在している。つまり、社会科学と、活動を通じて社会科学の主題を構成する人々との間には、互いが互いを解釈すると言う相互作用、すなわち「二重の解釈学」が存在しているのだ。社会科学の理論や発見をそれが対象としている意味や行為の世界から完全に切り離して維持していくことは不可能である。だが、一般の行為者は社会学理論化でもあって、彼らの理論から構成されてくる活動や制度こそが専門的な社会学観察者、すなわち社会学者の研究対象となるのである。一般の行為者が情報に基づいて行う社会学的反省と専門家による同様の企てとの間に、明確な境界線を引くことはできない。私は境界線が現に存在していることを否定するつもりはない、だが、そうした

境界線は曖昧なものである。それゆえ、社会科学者はその研究対象について革新的理論であれ経験的調査であれ絶対的に独占しているわけではない。(Giddens,1984=2015:21)」

さらに、こうした二重の解釈学は以下の2つの重要な問題と繋がっている。

まず、社会学分野における古典理論研究について、二重性の解釈はその現実的な意義を保っている。

「だが、社会理論の中に、それを生み出した状況が過去のものとなってもなお、長きにわたって新鮮さを失わない理論が存在しているのはなぜなのか、国家主権の概念や現実にもう十分慣れ親しんでいるというのに、17世紀の国家理論が今日の社会的ないしは政治的省察との結びつきを保っているのはなぜなのか。それは間違いなく、今日の社会的世界の構成に貢献してきたからに他ならない。そうした理論が省察している社会的現実はいずれも構成に貢献しているものであり、今日の社会的世界とは隔たりを持っていると同時に、依然としてその一部でもある、という事実こそが我々の関心を引き付けるのである。自然科学の場合、ある理論が同じテーマについてのさらに優れた業績にその地位を奪われてしまうと、もはや最新の科学的実践にとっては興味を呼ぶものではない。だが、自らの解釈や解明の対象を構成してきた社会科学の理論には、こうしたことが当てはまらない。「観念史」が活躍中の自然科学者にとって周縁的な重要性しか持っていないとしても、確かに最もなことかもしれないが、しかし社会科学にとって『観念史』は、軽い扱いで済ませられるものでは決してない。」(Giddens,1984=2015:23)

この意味で、社会科学は「未熟」な学問では決してなく、それどころか社会的世界へ大きな影響を与えているに違いない。ただし、それは自然主義的社会学が期待していた形ではないのである。

次に、社会学の役割について、二重性の解釈はその批判的性格を保証している。社会学の役割といえば、基本的に3つある、すなわちデュルケームが確立した実証主義の伝統、ヴェーバーが確立した人文主義の伝統、マルクスが確立した批判主義の伝統である。日本の社会学分野において「批判主義」という術語をあまり使わないが、この術語は以下の立場を指している。すなわち、社会学の役割は、社会的世界のさまざまな状況を実証し法則を探り出すのではなく、自らの批判によって、社会的世界の変革を参与し、より良い社会を作り出すのである。ギデنزの言葉で言えば「社会科学の実践的含意」なのである。(勿論、こうした批判主義的立場は実証それ自体に反対するわけではない、社会学を実証を通して法則を発見する学問と位置づけられることを反対するのである)。

第2に、時代遅れで不備な言語哲学への依存に関係する。この点について、ギデنز氏は以下のように述べる。

「正統派の社会学は一昔前に作られた旧言語観を前提としている。もっとも、この言語観はラッセル、初期ヴィトゲンシュタインおよび後続の論理経験主義から新しい刺激を受けてはいる。けれども、この言語観に従えば、言語とはとりもなおさず世界(物理的あるいは社会的)を記述する手段である。言語は記述手段として研究されるべきであり、そして言語の構成形式ないし基礎形態と言語が関与する対象世界との間には同型性があると言う。ヴィトゲンシュタインの「論理哲学論考」は、こと立場を発展させ精練させたものだが、これによると言語の基礎単位とは対応する現実の「画」である。」(Giddens,1979=1989:268)

ギデنز氏は基本的に後期ヴィトゲンシュタインの立場を取っている、すなわち、

「ヴィトゲンシュタインは初期の言語観を否定したが、それは日常言語哲学、シュッツの現象学そして現代の解釈学といった互いに全く異なる諸哲学の収斂とあいっつうしている。これらすべては、言語を記述手段とすることが誤りだと見なす。記述は言語の持つ数多くの機能の一つに過ぎない。言語は社会的実践の媒体である。このことは社会的行為者が関わる多様な活動全体に見られる。オースチンの有名な例がその事情を適切に示している。結婚式のスピーチはその式を記述しているのではない。それは式の一部である。また、言語は道具箱の道具と同じくらい様々な使い道があり多面的である、というののもう一つよく知られた例である。」(Giddens,1979=1989:268)

つまり、自然言語はそもそも記述の道具ではない、それゆえ、論理的に正確であるかどうかは自然言語にとって何の意味もない。逆に言えば、実践から生み出されるものとして、自然言語の正確さは実践の中での有用さに保証されており、厳密的な論理とは無関係なのである。(この言語の発生学の立場で言えば、実践を順調に進むためにある程度誤解を避けなければならない、それゆえに、概念や言語の全体的な「論理さ」あるいは「形式さ」が必ず現れる、ということだと考えられる。)自然言語の「有意味さ」と「論理さ」は、実践のコンテキストの中でのみ理解されるのである。

例えば、「今夜映画見に行かない?」「ごめん、明日テストがあるの。」この回答は論理的には回答になっていないが、日常生活においては紛れもなく回答になっている。なぜなら、会話の双方は実践によって出来上がった相互理解という基盤に立ち上がっているからである。こうした実践によって出来上がった相互理解——ギデنز氏の言葉で言えば相互知識——の重大な意義について、ギデنز氏はク

ン批判を通じて明らかにしたのである。ギデنزによれば、クーンがパラダイムの転換を説明できなかったのは、一つ重要な原因は、パラダイムの内的統一性を過度強調したからである。この問題に対して、ギデنزには「《すべてのパラダイムは》（「言語ゲーム」と等々と読み替えていただきたい）《別のパラダイムによって媒介される》ことを《出発点》にしなければならない。」（Giddens, 1993=2000:246）と主張した。つまり、社会の内部においてさまざまなパラダイム存在していても、それらのパラダイムは閉鎖的な体系ではなくて、「別のパラダイムによって媒介される」のである。そのうちに一番重要なのが実践によって出来上がった相互理解なのである。「相互的知識は意味の枠組みを媒介するために必要な手段であり、観察者が被観察者との間に共有している暗黙的かつ言説的な了解事項を括弧にくくる。」（Giddens, 1979=1989:274）したがって、こうした実践によって出来上がった相互理解は、行為者だけに利用されているのではなく、社会学者にも利用されているのである。この意味では、社会学の研究はそもそも社会的世界から離脱していないのである。これも二重の解釈学の理論的基盤なのである。

「相互行為は、人間という行為体のもつ組成する技能の所産である。『日常言語』は、相互行為の組成において、単に行いの《記述》（特性描写）媒体としてだけでなく、行為者間の《コミュニケーション》媒体としても根本的な役割を演じており、こうした記述とコミュニケーションは、日常生活の実践的活動のなかで、通常、互いに密接にからみあっている。したがって、言語の使用は、《それ自体》が実践的活動となる。日常生活の行為者による行いの記述の生成は、進行中の《プラクシス》としての社会生活にとって付随的な要素ではないが、社会生活の生産に無条件に必要であり、社会生活と切り離せない要素である。なぜなら、他者の行うことがらの特性描写が、もっと厳密に言えば、他者のおこなうことがらの意図と理由の特性描写が、コミュニケーション意図への伝達を実現するための手段となる、そうした相互主観性を可能にするからである。まさにこうした見地の中で、《理解》を、社会的世界に参入するための社会科学に固有な方法としてでなく、人間社会がその成員によって生産され、再生産される際の、人間社会の存在論的条件として認識しなければならない。それゆえ、自然言語が「有意味」なものとしての行為の組成だけでなく、相互行為におけるコミュニケーション過程にとっても中心的位置を占めているために、自然言語を頼みの網にすることは、社会学でのどのような類の「研究材料」の生成においても必要である。つまり、社会学の観察者は、自然言語のカテゴリーと何の結びつきも持たない専門的メタ言語を構築することはできない（それとは若干の理由を異にするが、自然科学の観察者も専門的メタ言語を構築できないことは、本当《かもしれない》）。観察を組み立てる際に、「暗黙知」が演ずる役割について行ったポランニーの立論と、理論形成におけるゲーデルの定理についての議論を参照されたい。しかし、この点は、社会科学では起こりえない意味で論争の的になってい

る。社会科学は世界の成員である主体がすでに「解釈している」世界を研究対象にしており、成員である主体は、この世界を「有意味なもの」として維持することで、この世界を研究のための世界《として》組成している。』(Giddens,1993=2000:257)

つまり、自然科学は外部の自然的世界から出発しなければならない、それに対して、社会科学の領域は実践によって出来上がった相互理解、すなわち内部の社会的世界なのである。実践によって出来上がった相互理解は社会的世界を存在論的基礎と読み取ることができる。

こうした新しい言語観に基づいて、ギデنز氏はパーソンズ流の社会学の「価値の一致」を完全に捨て去り、さらに、具体的研究の次元において、質的研究でも量的研究でも同じく実践によって出来上がった相互理解に基づいているゆえに、質的研究と量的研究は相互補完的な関係であると主張している。また、デュルケムのように、日常言語は「たんに群衆の混乱した印象を表現しているに過ぎない」。「私たちは、仮に一般の人々の用法にならうならば、結びつけるべきものを弁別したり、弁別するべきものを結びつけてしまう危険を犯すことになり、したがって物事の真の類似性を取り違え、それゆえ物事の特徴を誤認する危険を犯すことになる」と、否定するのではなく、それこそが社会科学の研究領域だと強調しているのである。

第 3 に、正統派の社会学は、自然主義の仮定に基づいて、過度に単純な社会科学の啓示モデルに依拠していることである。この啓示モデルは次のようなものである。

「自然科学の発見は自然界に関する通念を正す啓示を与え、神秘のベールをはがすことに意義があると仮定されている。科学の作業とは常識的な見解や態度を『調べ上げる』ことによって、それらのある部分が誤りであることを指摘したり、素人知識では十分でない対象や事象についてより詳しい説明を展開することにある。科学の進歩は日常の慣習的な信念の幻想を打ち破るのである。」(Giddens,1979=1989: 271)

しかし、ギデنز氏が指摘したように、社会科学は自然科学のような主体—客体との単純な関係ではなく、主体——主体との複雑な関係なのである。主体と主体との間には、実践によって出来上がった相互理解が存在しており、またこうした相互理解は行為者のみに利用されているのではなく、社会学者にも暗に利用されているのである。したがって、自然科学のような啓示モデルは社会科学分野で通じないのである。

そして、ギデنز氏は批判主義的 sociology が何を批判すべきかについて、相互知識と常識を区別している。

「シュッツが名づけた『知識在庫』は、実際には分析的に二つに分離できる要素を網羅している。まず、私がこれまで『相互知識』と総称してきたものがあり、この相互知識は、行為者が社会的生活を有意味な物事として組成し、理解するために用いる解釈図式を指している。この相互知識はを、私が「常識」と名付けたいものから区別することは可能である。常識は、物事が自然的世界や社会的世界のなかでなぜそのような形で存在するのか、あるいはなぜそのような形で生ずるのかを説明するために頼る、多少なりとも理由整然としたひとまとまりの理論的知識を構成するものとみなすことができる。常識的革新は、どんな出会いに対しても参加者が持ち込む相互知識を、典型的に下から支えている。相互知識は、常識が供給する「存在論的安心」の枠組みに、基本的に依拠している。」(Giddens,1993=2000:202)

つまり、解釈枠組みとしての相互知識は存在論的に社会的世界を保証しており、それに対して批判することができない。逆に言えば全ての研究は相互知識から出発しなければならないのである。「われわれは言語ゲームの解釈学的な出会いの必要条件である信念の確かさに対する敬意と、もう一つの信念の正当化に関する批判的評価とを区別しなければならない。もう少しわかりやすく表現すれば、私が「相互知識」と呼ぶものを単なる「常識」から区別しなければならないことだ。」(Giddens,1979=1989:273)こうした区別によって社会科学の役割も明確になるのである。社会科学の役割は「批判」であるが、相互知識批判ではなく、常識批判なのである(イデオロギー批判も常識批判に属する)。

第4に、正統派の社会学には行為理論が欠落していたことである。「この理論の欠落はまず第一に、社会科学の哲学としての自然主義の優越にその原因がある。自然主義をそのまま社会学に持ち込めば、行為は単に社会的原因の結果として説明されてしまう。パーソンズの「行為の準拠枠」は、行為の理論を機能主義に統合する試みとして、英語圏の社会学においてもっとも影響力のある総合的な理論図式となった。しかし、パーソンズの使用する行為の用語法にもかかわらず、しばしば彼の図式には行為主体の把握が欠落していると批判されてきた。すなわち、舞台設定がなされ、脚本が書かれ、配役設定も終えているのだが、奇妙なことに舞台には演技者が登場しない。」(Giddens,1979=1989:276)こうした行為理論の欠落について、ギデنزが以下のように指摘した。

「(パーソンズが)後期になって機能主義とシステム理論を強調したために、前期の「主意主義」への関心が埋めもれてしまったことにあるわけではない。主意主義の概念に初めから欠点が存在していたのである。(中略…)私の考えでは、パーソンズに多くを拠っている立場はどれ一つとして、この問題に満足のいく形で取り組み、この問題を私が本書で行うように社会理論の関心の中心に置くことができないのである。」(Giddens,1984=2015:25)

つまり、この問題はパーソンズの個人的な問題ではなく、自然主義的考えを受け入れることによってある種の必然性をもった問題なのである。この問題に対して、ギデنزらは構造化理論の中で最初から自然主義的考えを拒絶し、「行為を自らの行動条件について部分的な自覚をもった社会的行為主体」を中心とした現象学社会学やエスノメソドロロジーの成果を積極的に吸収している。この意味では、構造化理論は行為理論への復帰だと言えよう。

第5に、正統派の社会学が自然科学の実証モデルと密接に結び付いてきたことである。ここの実証モデルというのは、「哲学者たちが自然科学の「標準モデル」と名付けるものを指している。「標準モデル」はカルナップらの仕事に見られる論理実証主義の展開に依拠しているが、さらに「ベルリン・グループ」のメンバー（特にヘンペル）およびアメリカ哲学（例えばネーゲルに代表される）によって洗練され強化されたものである。」(Giddens,1979=1989:279)「この考えは、社会科学は演繹的に関係づけられた法則体系を定式化するという（あきらかに遠い）目標を目指すべきであり、そうして自然科学と社会科学の説明はともに観察ないし事象を法則の基に演繹的に包摂することになる、ということを指摘するために採用されてきた。」(Giddens,1979=1989:280)

しかしギデنزが指摘したように、社会科学には法則が存在しない、というのも、少なくとも自然科学のような法則は存在しない。二重の解釈学によって独特な性質をもった社会科学は、社会的なできごとに対して歴史としてみなすべきであり、その歴史的な脈を無視し法則のようなものを掘り出しても、それは一般的な法則にはなれないし、あまりにも意味がないのである。

実証主義モデルをに反対することは、必ずしも「寛大な」社会学あるいは人間主義的社会学を支持するのを意味しない。なぜなら、そもそも自然科学は正統派の社会学者らが考えたように、解釈学問題を排除している分野ではなかったからである。

「われわれは社会理論の現代的位相の下で二つの回転軸の同時的な動きの中に組み込まれている。これが私の言い分である。一つの軸は人間の社会活動の性格に関する理解の軸であり、もう一つは自然科学の論理形式に関する軸である。これら両者はまったく別個の努力ではなくて、共通の問題源泉から出てきたものである。というのは、自然科学の哲学的理解にとって解釈学の問題が不可欠なことが明らかになったのと同様に、因果分析を排除する社会科学の概念の限界もあきらかだからである。われわれは自然科学と社会科学を二つの独立した知的努力の産物として扱うことはできない。」(Giddens,1979=1989:281)

以上の5つの点から、ギデنزらは自然主義的社会学が引き起こした問題を徹底的に清算し、そしてある程度新しい社会学像を描いた。この新しい社会学像は構

造化理論の基盤であるとはいえ、構造化理論そのものを必然的に導き出すわけではない。すなわち、構造化理論のような強い存在論的主張より後退的な立場であり、そしてこの立場によって社会学者らの中により一般的な関心を呼んでいるものでもある。

しかしながら、以上の5つの点について、自然主義批判として十分であろうが、機能主義批判としてはまだ不十分で言わざるを得ない。実はギデنزの著作の中で、機能主義に対する態度は基本的に批判的であるが、微妙に変わったことがあるのであった。1976年の「社会学的方法の新しい基準」の中で、機能主義について、ギデنز氏は「少なくともデュルケムやパーソンズに代表される機能主義には、本質的に欠ける点が基本的に四つあるように私は思う。一つは、すでに言及したように、人間の主体的行為を「価値の内面化」に還元していることである。二つ目は、それにともない、社会成員の行いが社会生活を《能動的に組成する》とみなすのに失敗していること。三つ目は、孤立した状態にある規範なり「価値」を、社会的活動の、したがって社会理論のもっとも基本的な特徴ととらえるために、権力を《副次的な》現象とみなしていること。四つ目は、社会の中で相違し、相争う《利害関心》と関連で、相違し、相争う「解釈」を免れないものとして規範が《取り決め》られた性質をもつ点を概念構成のうえで中心にとらえるのに失敗していること、である。」(Giddens, 1993=2000:50)こうした批判は強いものであるが、機能主義を完全に拒否するものではなかったのであろう。しかし1979年の「社会理論の最前線」の中で、ギデنز氏は機能主義を有害なものとして、社会学から完全に排除しなければならないと強く主張している。また、批判の力点が置かれるところも「これまで機能で説明したものは本当に機能で説明しなければならないのか」や「機能を科学的説明としてはいったい何を説明したのか」といった問題へ移行したのである。この立場の微妙な変化は、ギデنز自身ははっきり言明していないが、「機能」という概念の「認知的経路」と関係していると考えられる。

この点を理解するのに G・レイコフの観点を参照されたい。G・レイコフはアメリカの言語学者、認知言語学の創設者の一人である。彼は最初生成文法の研究の従事していたが、生成文法が説明つけられないところがたくさんあることに気づき、そこから独立の思考をはじめ、生成文法と違って自然言語は別のメカニズムによって構築されたことを主張する。彼を中心として創設された認知言語学は、体験哲学を基礎として、認知心理学、認知人類学、後期ヴィトゲンシュタインを参照し、生成文法と違って概念と用法を基盤として言語の構築される過程を解明していく学問分野である。ここで彼の観点について細かく議論する必要はないが、ただ彼の隠喩(メタファー)に関する観点を援用したい。レイコフの基本的な観点の一つは、人間はそもそも抽象的概念を直接に理解する能力はない、抽象的概念は全てメタファーを通して理解されているのである。このメタファーは修辞法のメタファーを意味するのではなく、ある物事の枠組みを借用し他の物事へたとえるという意味なのである。つ

まり、社会の理解から言えば、社会学者らはそもそも社会という抽象的概念を直接に理解する能力はない、社会という抽象的概念を理解するのに、何かの枠組みを借用しなければならない。そして、社会学者らはその「何か」を通して初めて社会という概念を理解することができた、ということである。この「何か」は、社会学学説史を参照すれば明らかに有機体である。

このメタファーの問題について、日本の社会学分野の現状は、かなり前から、社会学者らも社会を有機体へたとえるという認知的方法を避けようとしたが、メタファーは概念を理解するのに役立つ道具として使い続けている。また、有機体メタファーを直接に使わないが生物学から術語を借用したりはする。「機能」という概念も、有機体メタファーと縁を切っていれば(実は不可能にもかかわらず)妥当的で有効な概念だと見なされている。しかしこういった状況に対して、認知言語学の観点から言えば、表には使っていないが裏にはその認知的経路は依然として変わっていない、ということであろう。

ギデنزがレイコフのようにメタファーを理論化していないが、1979年の「社会理論の最前線」から、有機体メタファー、社会実在論、進化論、社会の内的統合性、機能などの関係に注目しているに違いない。また、認知的経路を遡れば機能という概念は科学性に欠けるという点もかなりの程度に意識しているのである。例えば、「社会理論の最前線」の中で、ギデنزが「全体を有機的統一と捉える機能主義は、ときとして特に「規範機能主義」と呼ばれる。この特徴をもつ機能主義は、コント以来、デュルケムやパーソンズに容易に認められるものである。」(Giddens,1979=1989:122)

「機能主義は『何が個人を社会に統合するのか?』という問いへの回答それ自体が、社会を統合するものを説明するのだと前提するのである。この種の考え方(これは明に暗に、常に有機体とのアナロジーによって補強される)は、社会を緊張状態にある諸集団から構成されたものとしてとらえる可能性、言い換えれば社会をさまざまなレベルで葛藤する、権力関係にある諸集団としてとらえる可能性を、事実上排除してしまう。」(Giddens,1979=1989:122)

上記のように、機能主義の社会観問題を有機体メタファーと関連させて説明した。この点についてさらにはっきり表現しているのは、「社会の構成」の中である。

「だが、「社会的システム」という概念や、「社会」という関連概念については、十分に慎重な態度を取らねばならない。これらの言葉は無害のように思われるうえに、適切な配慮をもって用いられるならば、おそらく不可欠でもあるだろう。「社会」には、境界線をもったひとつのシステムと社会結合一般という二重の意味があり、私もそれに依拠してきた。範域化に照準することによって、社会システムの「システム性」

の程度が著しく可變的で、「社会」が容易に特定できる境界線を持つことが———少なくとも、国民国家から成り立つ近代世界へと突入するまでは———まれである、ということが想起されるようになる。機能主義と自然主義の影響を受けた者たちば、社会が明確に境界を定められた実体であり、社会的システムが内的強固な統合をもった統一体である、と何の疑いもなく思い込んでしまう傾向にある。というのも、機能主義や自然主義は概して、たとえ有機体をそのまま譬喩として持ち出してはいなくても、生物学の諸概念と緊密に結びつき、最後には、環境世界からはっきりと切り離れ明瞭な内的統一性をもった実体へと関わっていくからだ。」(Giddens,1984=2015:15)、

「いまなおパーソンズに大きく依拠しているものが、機能主義者という自認をやめ、パーソンズの思考がもつ機能主義的傾向を程度はともかく拒絶してしまった。だがそれでもなお、彼らが受け継いでいる他の着想は機能主義のほとんどと結びつきを保っている。例えば彼らは「価値の一致」や象徴秩序に魅了されるあまり、社会活動のいっそう日常的で実践的な位相を等閑視している。また、簡単に境界を設けることのできる統一体であるという点で社会が生物有機体と同じである、と想定する傾向にある。さらに、進化論的な様式の理論を好んで用いてもいる。私の見るところ、こうした主張のどれをとっても重大な誤りを犯しており、それらには大きな制限を設けていくつもりである。パーソンズの著作を斬新なやり方で展開することを試みている論者の著作、とりわけルーマンとハーバーマスの著作には、間違いなく意義と重要性が備わっている。だが、新種のパーソンズ主義を否定していくことは、非パーソンズ的な構造社会学をさらに時間をかけて確立していくことと同様、どうしても必要なことである、と私は考えている」(Giddens,1984=2015:26)、

「だが、「構造」が機能主義者や大多数の社会分析家によって通常どのように理解されているかについては、改めて語るまでもないだろう。彼らにとって、「構造」とは社会関係や社会現象のある種の「パターン化」なのである。「構造」が視覚的形象から素朴に考えられると、有機体の骨格や形態学、あるいは建物の梁に比類されることが多い。」(Giddens,1984=2015:43)

つまり、ギデنزズはレイコフのように、メタファーを抽象的概念への認知のメカニズムとして理論化していないが(レイコフはほぼギデنزズと同時代であって、また認知言語学が繁栄したのはこの二十年間ぐらいのであるゆえに、ギデنزズは認知言語学を参考することができなかったのであろう)、かなりの程度に、機能主義者らが抽象的概念へと認知する際に、その認知的プロセスに問題があるということを認識している。こうした認識は 1979 年の「社会理論の最前線」の中で言及されており、1984 年の「社会の構成」の中さらに明確になったのである。1976 年の「社会学の新

いい方法基準」と違って、「社会理論の最前線」と「社会の構成」これら二つの著作の中で、機能概念が科学的説明として実質的に無効であることを批判の中心に置く点も一致している。つまり、ギデنزらは機能主義を徹底的に反対することは、この認識と緊密に関係する、ということ他ならない。

機能主義が明に暗に有機体メタファーに導かれ、さらにいくつかの重要な問題を引き起こしている。大きく以下の3点へまとめることができると考えられる。

第1に、社会を内的統一性をもった実体として扱う傾向がある。社会を有機体へ例えるのは近代からのものではない、古代ギリシアの時すでにあつたのである。社会学分野において、コントは既に有機体メタファーを通じて社会を説明したことがある、その後、スペンサーはそれを一つの説として提示し世界中へ影響を及ぼしている。こういったメタファーから生じた実体観はデュルケームによって統計データ分析を通してさらに強化された:統計学の中で、例えば X 地域の住民の自殺率は一つのランダム変数にすぎない、実体とは関係ない。しかしデュルケームは自殺率の差異を社会類型と結びつけて説明している。つまり、実体である社会の差異は自殺率で説明できるということを暗に提示しているのである。こうした実体観は20世紀の後半から現実的な問題に遭遇した、すなわち、グローバリゼーションがあまりにも進展したゆえに、実体である社会の間にあつた境界を保たれなくなるということである。社会の内的統一性があまりに強調されたゆえにグローバリゼーションが説明できない、この点も多く機能主義理論の共通的な問題になっている。

機能主義的実体観に対して、ギデنزらは世界システムへの関心を強調している。「社会理論と現代社会学」に収録された「社会学の将来についての九つのテーゼ」の中で、「世界システムの研究に、社会学は、従来よりもはるかに多く関与することになるだろう」を第四のテーゼとして提出し、以下のように述べている。

「特定の社会や、あるタイプの社会が世界システムへと巻き込まれるということが、それらの社会の発展の軌道に及ぼすであろう影響のいくつかの基本的な在り方を追跡することに、社会学者が主としてかかわるのであれば、それはまったく適切なことである。世界システムの影響を無視することは、社会の理論化においても、経験的な研究においても、今後ますます難しくなっていくであろうし、もし無視するとすれば、自らの考え方の妥当性が実質的に弱められたり、完全に掘り崩されたりしてしまう危険にさらされることになるだろう。」(Giddens,1987=1998:57)

第2に、進化論的傾向がある。実体論は基本的に社会の内的統一性を強調する立場にある、それゆえ、社会変遷を取り上げる際に、世界システムの影響を無視し、変遷は社会の内発的な力によるもたらした結果だと解釈する傾向がある。社会学において、こうした傾向がよく進化論という様式で現れてくる。

進化論のうちでもさまざまな形があるが、全体的に、ギデنزには進化論の問題を4点にまとめている：

1、単系的圧縮。すなわち、「一般的進化を特定の進化へと圧縮するという進化論者に見られる傾向を言い表している」(Giddens,1984=2015:276)、例えば、社会の変遷を封建主義——資本主義——共産主義のように捉え、各段階の間にある種の必然性によって結びつけられるという単純な図式である。

2、相同的圧縮。「社会進化の諸段階と個人のパーソナリティの発達との間に相同性が存在していると考えられる傾向のことである。」(Giddens,1984=2015:276)この点について、フロイトと彼の影響を受けたマルクーゼは典型的な例である。しかし、ギデنزには現代人類学の経験研究によって否定することができると主張している。

3、規範的幻想。「経済的であれ、政治的、軍事的であれ、権力の優位性を進化論的な尺度でみた倫理的な優位性と重ね合わせる傾向のことである。」(Giddens,1984=2015:278)この点はパーソンズが当てはまるのである。この点が引き起こす問題も単純で、すなわち「確かに、こうした傾向は進化論が孕んでいる自民族中心主義的な意味合いと密接に結びついているが、それと全く同じというわけではない。適応の概念がこの連関の中でまたしても危ない概念となっている。それは民族的に中立的な響きをもつ、あたかも、「適応能力」に優れていれば、事実上規範的に優れた社会的特徴を持っているというかのようだ。」(Giddens,1984=2015:278)、そして、ギデنزの反論は「しかし、人間社会に応用されると、適応という言葉は能力の同義語とされることが多い、力は正義ではない、という古の格言があるが、進化論に与する理論家は、その進化論的な傾向のために、この格言を往々にして忘却してしまっている。」(Giddens,1984=2015:279)

4、時間的歪曲。すなわち「「歴史」が社会変動としてのみ記述可能であると想定する進化論者の傾向である。つまり、時間の経過が変動と同一視され、「歴史」が「歴史性」と混同される傾向を言い表している。」(Giddens,1984=2015:279)

したがって、ギデنزには進化論と決別しなければならないと主張している。

3、機能概念は科学的説明として実質的無効である。解釈学の伝統に影響されているギデنزには、科学哲学の中の「科学的説明」という課題にとりわけ注目している。科学的説明というのは、科学はいったい何を説明したのかについて、その説明の実質を追究する課題である。すでに言及したように、「機能」という言葉は最初から有機体メタファーと関わっている。それゆえ、「〇〇の機能がある」という説明の含意も、有機体メタファーなしには理解されることができない。言い換えれば、「〇〇の機能がある」という説明の仕方は、聞き手の脳の中に有機体メタファーを暗に喚起させ、社会は有機体と同じく各部分が機能しているという前提と受け入れさせ、そして有機体メタファーから説明の説得力を獲得する、という過程が隠されている。したがって、「機能」を説明としては実質的に何かを説明しているのではなく、虚偽

の説明にすぎないのである。

ギデنزは、「教育は資本主義社会において労働の職業的な分割の中で個人に地位を配分する機能を持っている」という命題は、「労働の職業的な分割が維持されていくためには、教育システムは個人が職業的な地位へとそれぞれ差別的に配分されていくことを保証しなければならない」と内容的に同一であり、実際は「労働の職業的な分割が維持されていくために、教育システムはどのようにすれば個人が職業的な地位へとそれぞれ差別的に配分されていくことを保証できるか」という問題が提示している。「機能」は新たな問題を提示しているだけで、実質的に何も説明していない。したがって、マートンの雨乞いの例から言えば、統合性が高まったという結果は、機能的結果ではなく、意図せざる結果なのである。「社会活動——機能的必要——機能的結果」を「社会活動——目的的行為——行為の意図せざる結果」として理解すべきだとギデنز主張している。

以上の批判によって、ギデنزは結局機能主義を完全に拒否する立場に至った（ギデنزをよく折衷主義だと言われるが、これまで示したように、明らかに適切ではないと考えられる）。勿論、パーソンズ以降、機能主義もさまざまな新しい展開があった、しかも「間違いなく意義と重要性が備わっている」。ギデنزはそれらに対して直接的に批判していないが、「たとえ有機体をそのまま譬喩として持ち出してはいなくても、生物学の諸概念と緊密に結びつき、最後には、環境世界からはっきりと切り離れ明瞭な内的統一性をもった実体へと関わっていくからだ。」「彼らにとって、「構造」とは社会関係や社会現象のある種の「パターン化」なのである。「構造」が視覚的形象から素朴に考えられると、有機体の骨格や形態学、あるいは建物の梁に比類されることが多い。」と、その概念の背後に隠されている認知的プロセスにはどうしても正当化できないという大きな問題があると指摘している。つまり、ギデنزパーソンズ以降の機能主義を直接的に批判することはなかったが、機能や構造などの概念の認知的経路を批判することによって、実際には機能主義の立場をなくさせたのである。

1987年の「社会理論と現代社会学」が所収のA・ギデنزの論文「社会学の将来について九つのテーゼ」において、ギデنز社会学これからこう展開していくだろうの九つのテーゼを簡潔に論じた。その九つのテーゼは：1、社会学は十九世紀や二十世紀初期の社会思想の残存物を徐々に払拭していくであろう。2、社会学的論争に一新された統一性を与えつつ理論的総合が登場するであろう。3、社会学の分析の主要対象は実質的に再考されるであろう。4、社会学は従来よりもますます世界システムの研究に関与するようになるであろう。5、社会科学の間の既存の境界は徐々に現在よりもゆるやかなものになっていくであろう。6、社会学者は社会変革の大規模で長期的な過程についての関心を再展開するであろう。7、実践的な社会政策や社会変革に社会学はますます深く関与するようになるであろう。8、社会運動が社会学的想像力の刺激要因として最も重要なものであり続けるであろう。

う。9、社会学はかつてそうであったように論争的な科学であり続けるであろう。この九つのテーゼの中、理論的問題と関わる 1 から 4 のテーゼはほとんど正統派の社会学への反論だと言えよう。つまり、ギデنزは正統派の社会学の問題点を一つの思考の基盤とし、パーソンズ以降の社会理論はそこから出発すべきだと、世界中に広い関心を呼んでいるのであろう。

ギデنزの場合、自然主義と機能主義に対して建設的に批判することによって、新しい社会学の位置づけや役割が提示されたのである。この意味で、ギデنزの 1976 年の「社会学の新しい方法基準」はかなり重大な意義があるのである。「社会学の新しい方法基準」の中で、二重の解釈学が提出され、自然主義的社会学の枠組みを打ち破り、批判主義的社会学の立場を確立した。また、実践によって出来上がった相互理解を社会科学の研究領域と設定し、自然科学と区別した。さらに、相互知識と常識を区別することによって、常識を批判の対象と設定し、社会学の役割を明確した。つまり、ギデنزの「社会学の新しい方法基準」は完全にデュルケームの「社会学的方法の基準」の中で提示された実証的社会学を転覆し、新しい社会科学を提出したのである。ある意味では、ギデنزの「社会学の新しい方法基準」以後の著作はほとんど「社会学的方法の基準」の観点の延長線上にあり、さらに細緻化されたものとして理解することができる。ギデنزの構造化理論も、こうした立場を十分理解した上で初めて理解することが可能になるのであろう。

## 第 2 節 二元論に対する存在論的批判

ギデنزの構造化理論のもっとも重要な課題の一つは、社会理論分野における根深い二元論を調和することである。すなわち、構造主義、機能主義に代表される客観主義的社会学と理解社会学や現象学社会学などに代表される主観主義的社会学との対立を解けることである。

あらかじめ説明しておく、ギデنزがいった「理解社会学」という言葉は、基本的に二つの意味がある、すなわち、ヴェーバーの理解社会学と、ヴェーバーの理解社会学、シュッツの現象学社会学、後期ヴィトゲンシュタイン哲学を含み、理解や解釈を主題とする諸潮流の総合である。エスノメソドロジーの立場は微妙なところがあるのであろうが、構造化理論の中でのエスノメソドロジーの吸収を参照すれば基本的に主観主義的社会学へ帰属されていると考えられる。

客観主義的社会学の一番重大な問題は主体の欠如である。すでに議論したように、パーソンズの社会学は自然主義と機能主義を基盤とし、主体の動きを社会環境などの客観的なものに決定されるものだと見なされる傾向がある。そして、主体の自由は社会的秩序を破壊することにしか見られない。構造主義の問題は機能主義とはかなり異なる形であるが、結果的に同様である。例えばレヴィ・ストロースの構造

は人間の潜在意識に存在し、表の行動を支配する認知的構造であり、フーコーのエプステーメ(épistémè)は主体や人間学より超越し、歴史を回転させる主体なきの構造である。デリダの差延(différance)は差異システムの無限の延長の中に、または共在と不在の交差の中に作動している言語を説明するのに役に立つかもしれないが、社会的意義を持った言語、すなわち主体の実践に使われているコミュニケーションの媒介としての言語そのものを説明するのに何の貢献もない。

主観主義的社会学は逆である、すなわち、主体をあまりにも重視されてしまった結果、権力関係や社会変遷や社会構造などの存在を見えなくなったのである。とはいえ、主観主義的社会学のこうした問題はほとんど視野の狭窄の問題へ帰結することができ、これまで出された成果は厳密的な反省と観察に基づいているゆえに、参考に値するところが多い。したがって、ギデنزとは主観主義的社会学、特にシュッツの現象学社会学に対して、機能主義のように完全に拒否する立場ではなく、逆に積極的に参照し受け入れているのである。

既に言及したように、こういった二元対立問題は、かなり根深い問題で、人文社会分野における他のさまざまな二元対立と何らかの形で関連している、例えばデュルタイの精神科学とコントの実証主義との対立、人文科学のパラダイムと自然科学のパラダイムとの対立、社会実在論と社会名目論との対立、主意主義と決定論との対立、構造と主体との対立などが挙げられる。こうした二元対立問題を解けるのに、まずこの問題の正体を明らかにしなければならない。周知のように、社会学分野において、「社会」に対しての存在論的観点は基本的に三つがある、すなわち社会実在論、社会名目論、形式社会学である。こうした二元対立問題の中に、客観主義的社会学は社会実在論と、主観主義的社会学は社会名目論と、ほぼ対応している。そして、こうした存在論次元の違いはさまざまなところで分裂を引き起こし、さらに分裂を拡張していた。つまり、二元対立問題はそもそも存在論的な問題であり、それを解決する方法も一つしかない、すなわちこれらの観点に対して存在論次元で批判を加え、そして「社会」に対して新しい存在論的観点を提出することである。

さて、構造化理論において、二元対立問題はどのように処理されているのか。この問題について、普段は主体と構造との関係から理解されることが多い、すなわち構造は単なる制限ではなく、主体の行為の条件でもあり、結果でもある。確かに、それは一つのポイントではあるが、しかしギデنزの思想の全体から見れば、実は「構造」ではなく、「実践」なのである、構造化理論はほとんど実践概念を中心として展開されているのである。また、概念の間の関係から言えば、「構造」概念は「実践」概念の基盤の上で存在しうる概念にすぎない。

ギデنزの「実践」概念のルーツについて、関口俊之はL・ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論の影響を受けていると主張している、それは紛れもなく事実である(これからの議論の中で、この点を示すことができる)。とはいえ、構造化理論の概念図式から考えれば、ヴィトゲンシュタインの影響はだいたい言語と実践との関係のどこ

ろに止まっており、二元論を克服するための実践概念はやはりマルクスから継承したものだと考えられる。ギデنزの構造化理論を理解するのに、まずマルクスの実践概念について考察しなければならないのであろう。

マルクスの実践概念は、哲学の文脈の全体においてもかなり独特なものであった。哲学の文脈の中で、実践を専門用語として使われたことはアリストテレスまで遡ることができる。アリストテレスによれば、人間の活動はテオリア、プラクシス、ポイエーシスという三つの種類がある、おおむね理論的活動、社会的活動、制作的活動を指している。当時の社会状況から考えれば、その三つの種類はだいたい哲学者、市民、奴隷と対応している。プラクシス(実践)は市民の倫理的・政治的活動のことを意味するのである。また、奴隷の生産・制作活動を自然に制限される活動としてアリストテレスはポイエーシスをプラクシスからはっきり区別している。アリストテレス以降、実践概念はさまざまな哲学者の手によって多様に意味づけられてきたが、ほとんどアリストテレスの人間行動の三分法の枠組みから脱出していない。その意味では、マルクスの実践概念もアリストテレスへの反発として理解することができる、なぜなら、マルクスの実践概念はどちらかというポイエーシスに近い、そしてテオリア、プラクシスは上部構造へ帰結される傾向があるからである。

しかし、マルクスの実践概念は内容的にポイエーシスに近いとはいえ、哲学的な意義は完全に同じレベルではない。マルクスの実践概念の形成過程において代表的な「フョエルバッハに関するテーゼ」(「実践」が二元論を乗り越えるための核心的な概念として提示された最初の著作でもある)の中で、マルクスは実践概念を哲学批判の肝心の概念として使っている。例えば、第一テーゼでは、「フョエルバッハを含めたこれまでのすべての唯物論の主な欠陥は、対象・現実・感性が単なる客体の、または傍観者の形式のもとでだけとらえられていて、人間的な感性的活動・実践として、主体的にとらえられていないことである。ゆえに、能動的側面は、唯物論に対立して観念論によって展開されることになった。しかしただ抽象的に。なぜなら、観念論は現実的・感性的な活動を、まさに現実的・感性的な活動としては知らないからである。フョエルバッハは、人間の頭に映った客体とは現実的に区別された、現実の客体を求めているのだが、しかし、人間的活動そのものを対象的活動としてはとらえようとしない。だから、『キリスト教の本質』の中でただ傍観者的(客観的)態度だけを真に人間的な態度と見なした。他方で、それに対して、実践はただ不潔で、ユダヤ人的な現象形態においてだけとらえられ、固定される。ゆえに、彼は「革命的」な活動、「実践的・批判的」な活動の意義を理解しない。」と述べた。

つまり、以前の硬直的な唯物論は客体を直観的に理解し、人間の能動的側面が見えない、その反面、観念論は能動的側面を展開したが、その展開はあまりにも抽象的で、現実すら見えなくなるとマルクスは批判した。その批判を可能にしたのは、実践概念の再解釈である。そして、第三のテーゼの中で、マルクスは「環境と

教育に関する従来の唯物論的な議論は、環境が人間によって変えられ、教育者自身が教育されるものだという反作用を忘れている。ゆえに、従来の唯物論は社会を二つの部分に分け、一方を社会を越えたところにあるものとしてしまう。環境を変革することと、人間的活動・自己変革との合致は、変革する実践であるとだけとらえることによってはじめて合理的に理解することができる。」と、二元論を批判した。その批判のキーワードも実践だった。

つまり、既存の哲学思想を批判することが可能にしたのは、この実践概念ほかない。そして、この実践はなぜそのような批判的力を持っているのか、フォイエルバッハから説明しなければならない。

第一のテーゼの中で、マルクスは実践の意味を「人間的な感性的活動」と解釈した。その「感性的」という言葉は、多くの哲学者が指摘したように、フォイエルバッハから引き継いだものに違いない。フォイエルバッハの哲学は一言でいえばヘーゲルの逆転である。つまり、理性を尊び目の前にある現実を否定するヘーゲルの哲学を逆転し、感性こそが現実であることを強調する哲学である：「その現実性においての、また現実的なものとしての現実的なものは、感官の対象としての現実的なものであり、感性的なものである。真理、現実性、感性は同一である。ただ感性的存在だけが、真の存在、現実的な存在である。」(Feuerbach, 1967:68)。

しかしフォイエルバッハが強調したのは、「感性的」にすぎなかった。その哲学はまだ西洋的な哲学の枠組みから脱出することができていない。この点について、マルクスは、フォイエルバッハを以下のように批判をした：

(第四のテーゼ)フォイエルバッハは宗教の自己疎外という事実、すなわち宗教的世界と世俗的世界への、世界の二重化という事実から出発する。彼の仕事は、宗教的世界をその世俗的基礎へ解消することにある。だが、彼はこの仕事を終えた後に、なおやるべき重要な仕事が残っているのを忘れている。すなわち、現世的基礎が自分自身から浮き上がって、雲の上に一つの独立した宗教の王国として作り上げられているという事実は、まさしくこの基礎となっている現実そのものが自己分裂状態にあり、自己矛盾に陥っているということを意味しているのである。ゆえに、例えば、天上・宗教上の秘密が実は地上の問題にすぎないということが暴かれた以上は、今度は地上の問題そのものが理論的に批判され、実践的に変革されねばならないのである。

(第五のテーゼ)フォイエルバッハは抽象的な思考にあきたらず、感性の力で直接に対象をとらえようとする。しかし、彼は感性を実践的な、人間的・感性的な活動としてとらえない。

(第六のテーゼ)フョエルバッハは、宗教の問題とは結局人間の問題である、というふうに解消する。しかし、人間の本質は、個々人に内在するいかなる抽象物でもない。人間の本質は、その現実性においては社会的諸関係の総体である。この現実的なあり方の批判に乗り出さないフョエルバッハは、次のようになってしまう。

- 1、歴史的経過を切り捨て、宗教的心情をそれのみで固定し、一つの抽象的な、孤立した人間の個体を前提にしてしまうこと。
- 2、ゆえに、彼にあっては、人間の本質はただ「類」という一般概念として、内なる、無言の、多数個人を自然に結び合わせたにすぎない普遍性としてのみとらえられてしまう。

(第七のテーゼ)それゆえにフョエルバッハは、「宗教的心情」そのものが社会的に生み出されたものだということ、そして彼が分析する抽象的個人が、ある特定の社会形態に属するということを見ようとしなさい。

フョエルバッハに対する批判であるが、西洋哲学の人間像に対する徹底的な批判でもある。なぜなら、西洋哲学の人間像はほとんど抽象的な個体としての世界を静観している人間像であり、フョエルバッハはその伝統を引き継いだだけであるからである。すなわち、フョエルバッハの哲学の問題は、西洋哲学の枠組みから脱出できていないから生じた問題なのである。マルクスはフョエルバッハの人間像は「抽象的」と評価したのも、そのためである、つまり、フョエルバッハは感性の重大な意義を強調することで理性を異常に発展させたヘーゲル流の哲学を批判することを成し遂げたといっても、その批判は根本的な批判とは言えず、ただ新しい抽象的人間像を作っただけである。マルクスに言わせれば、人間そのものを見ることができていない、ということである。そして、マルクスの主張は、人間を抽象的にとらえてはいけなく、人間的な感性的活動を、いわば実践をする人間としてとらえるべきだ、ということにほかならない。「人間的な(menschliche)」という言葉について、第五のテーゼを対照して考えれば、「現に活動している生身の人間」を意味すると考えられる、また、「活動(Thätigkeit)」という言葉について、日常的に行き、仕事、営みなどの意味もあるが、どちらにしても、静観的な人間ではなく、行動する人間という含意は明らかであると考えられる。つまり、マルクスは西洋哲学の抽象的な個体としての世界を静観している人間像を根本的に批判し、それと正反対に、具体的な社会的な現に行動している人間像を示した。

こういった実践概念はなぜ主体と客体の二元論を克服できるか、実践の認識論的な意義から説明しなければならない。二元論に対してマルクスは批判的な態度を持つが、主体と客体を認めないわけではない、さらに主体と客体の重大な意義が強調されているのである。マルクスが示そうとしたのは、主体でも客体でもそれな

りの重要さがあるものの、その主体と客体は最初から主体と客体として存在することができないわけではない。主体も客体も実践によって形成されるものだと考えられる。すなわち、実践は主体と客体より先行するということである。なぜなら、論理的に言えば、「人間には能動性がある」は「人間は最初から能動性がある」というのを意味するわけではない、人間はいくら能動性があるといって、その能動性は実践によって顕在化しないかぎりあくまでも傾向的・潜在的な能力にすぎない、実践が行われてから、初めて能動性として現れる。その意味で、主体と客体は内容的に充実されなければ、何の意味もない、実践にかけてから、主体と客体は初めて主体性と客体性を獲得する。つまり、実践なしには主体は主体として存在することができない、それと同様、客体も客体として存在することができないからである。マルクス以前の哲学者はこの点を認識できなかったゆえに、物はそのもの自身か人間の認識対象かのどちらかに戸惑われ、唯心主義あるいは硬直的な唯物主義に陥ってしまう、マルクスの観点では、主体と客体の関係は理論などに規定されるものではなく、実践によって形成されるものなのである：

「But men do not by any means begin by “finding themselves in this theoretical relationship to the things of the outside world.” They begin, like every animal, by eating, drinking, etc., that is not by “finding themselves” in a relationship, but actively behaving, availing themselves of certain things of the outside world by action, and thus satisfying their needs. (They start, then, with production.) By the repetition of this process the capacity of these things to “satisfy their needs” becomes imprinted on their brains; men, like animals, also learn “theoretically” to distinguish the outer things which serve to satisfy their needs from all other. At a certain stage of evolution, after their needs, and the activities by which they are satisfied, have, in the meanwhile, increased and further developed, they will linguistically christen entire classes of these things which they distinguished by experience from the rest of the outside world. This is bound to occur, as in the production process—i.e. the process of appropriating these things—they are continually engaged in active contact amongst themselves and with these things, and will soon also have to struggle against others for these things. But this linguistic label purely and simply expresses as a concept what repeated activity has turned into an experience, namely that certain outer things serve to satisfy the needs of human beings already living in certain social context //this being an essential prerequisite on account of the language//. Human beings only give a special (generic) name to these things because they already know that they serve to satisfy their needs, because they seek to acquire them by more or less frequently repeated activity, and therefore also to keep them in their possession; they call them “goods” or something else

which expresses the fact that they use these things in practice, that these things are useful to them, and they give the thing this character of utility as if it possessed it, although it would hardly occur to a sheep that one of its “useful” qualities is that it can be eaten by human beings.」(Marx, 2017)

つまり、実践は主体と客体の内容を充実し、主体と客体の関係を規定する。反復されている実践の中で固定化した実践の在り方は、社会生活を形作ったのである。

こういった実践概念について、以下の3点を強調しなければならないところがある。第一、マルクスは実践概念は、主体と客体より先行する概念であり、そして、主体あるいは客体は静観によって把握できる不変なものではない、主体も客体も実践の中で形成かつ再形成され、一刻も止まることなくずっと実践の中で変化していくのである。この意味では、実践概念は既に二元論を乗り越えたと言えよう。第二、実践は現実世界に変化をもたらす過程である。第三、実践は認識論の基盤という意味で、文化と社会生活の形態と関連している。

しかしながら、こういった実践概念は新たな問題ももたらしているのである。以下の二点を指摘しなければならないと考えられる。第一、実践は概念としては充実したものであるが、具体的な研究の中で、人間の行動とはほぼ内容的に同一である。実践を社会学の研究対象としたとしても、研究対象や研究方法や研究目的をどうすべきか、といった一連の問題に対して、実践概念自身は何も示していない。つまり、学問を創立するならば、実践概念だけでは不十分で、科学的に方法論について検討することが必要である。マルクス自身は当時のドイツの現状にとっても失望し、現実的な革命へ献身したほうが効果的だと、実践概念に基づいて学問を構築することを目指していなかった。第二、実践は概念的に主体よりも客体よりも先行するが、人間はなぜ実践しようとするか、その実践しようとする傾向性が問題となっている。この点についても実践概念自身が何も示していない。マルクスの場合、この問題については結局実践と食糧を得るための生産活動と結びつけられた。この設定は、マルクスの思想の中の経済が過剰に強調されるなどの問題と関連していると考えられる。この二つの問題は、ギデنزが直面しなければならない問題でもある。

マルクスのこうした実践概念を理解した上で、構造化理論はこうした実践概念を如何に活用したかを議論することができる。

構造化理論の実践概念を議論する際に、言葉の問題を前もって強調しておきたい、すなわち、praxis と practice との問題である。田邊浩は「通常 praxis は、その語源からして自由な行為を意味し、マルクス主義的色合いをおびて変革をめざした活動といった意味合いで用いられることが多が、ギデنزの場合、それは人間は受動的客体でもないし、かといって完全に自由な主体でもないという意味で用いられている。一方 practice は慣習的行動とか日常的行動を意味する。」(田邊浩,1990)

と、ギデنزが praxis と practice を使い分けていると主張した。実際はそうではなく、1984 年の「社会の構成」の中で、praxis が使われるときに全て斜体だった、すなわち「外国語」という意味で使われる時だけで (praxis はドイツ語)、引用を表す時に使われている、ギデنز自身はそれをはっきり使い分けているのではない。さらに、ギデنزの著作の中で、practice はマルクスの praxis との一貫性を示している。この点はこれからの議論の中で示すことができる。

マルクスの実践概念に対して、ギデنزが高く評価し、そしてそれを基盤として構造化理論を展開した。1997 年のインタビューの中で、ギデنزが「私は、社会生活の能動的な流れを強調したかったのです。私たちは、社会生活を、たんにあちら側にある「社会」として、あるいはこちら側にある「個人」の所産としてとらえるだけでなく、人々が遂行する一連の継続した活動や実践としてもとらえていくべきです。こうした人々の一連の継続した活動や実践が、同時にまたもっと大きな制度体を再生産することになります。これは、私の独自の思索でした。このような思索から、私は、まさに「行為能力」と「構造」という言い方によって、この考え方の鍵になるそれぞれの用語を精緻なものにしようと試みたのです。私は議論を「個人」からはじめたり、あるいは「社会」からはじめるかわりに、むしろ反復的に生ずる社会的実践という考え方を、社会科学がおこなおうとすることがらの中心にすえていったのです。」(Giddens and Pierson, 1998=2001:119)と、構造化理論の最初の考えを、「実践」を基礎としての「個人」や「構造」などの諸関係であるというふうにて述べた。

構造化理論に対して全体的に言えば、ギデنزの構造化理論におけるマルクスの実践概念の受容は、筆者は以下の三点へまとめることができると考えられる。

- 1、認識論の次元において、二元論を克服するための実践。
- 2、マクロな視角での歴史を作った過程としての実践。
- 3、ミクロな視角での日々に反復されている実践。

まず、「存在論と認識論の次元において、二元論を克服するための実践」について、前節で述べたように、マルクスが実践概念を提起する背景、すなわち唯心主義と唯物主義との対立は、ギデنزが直面した 1960 年代からの理解社会学とパーソンズ流の社会学との対立とは、かなり似たような状況であった。そして、実践概念の役割も同様、すなわち二元論を克服するための核心的な概念であった。具体的に言えば、1971 年の「資本主義と近代社会理論——マルクス、デュルケム、ウェーバーの研究」の中で、ギデنزがマルクスの観点を、「There is, in fact, a constant reciprocity between the consciousness and human Praxis.」(Giddens, 1971:20)と述べた。1979 年の「社会理論の最前線」の中で、「私は社会的実践を、実践的意識とともに、社会理論における伝統的な二つの二元論を媒介する重要な契機とみなす」(CPST p.5)と、実践は主体と客体の媒介する契機であると主張した。1981 年の「A

Contemporary Critique of Historical Materialism, vol. 1: Power, Property and the State」の中で、史的唯物論について、生産力の向上説や階級の闘争説や社会進化図式などに対して拒否する態度を表明した後、

「Only if historical materialism is regarded as embodying the more abstract elements of a theory of human Praxis, snippets of which can be gleaned from the diversity of Marx's writings, does it remain an indispensable contribution to social theory today」(Giddens,1981:2)

と、実践概念の重大な意義を強調した。1984 年の「社会の構成」の中で、ギデنز自身が高く評価した史的唯物論はマルクス主義者の限定された史的唯物論ではなく、

『「人間が歴史を作る」という引用の中で述べられているように、人間の社会生活が実践(praxis)、つまり日常生活を遂行する中で実行される慣習的な行動の中で形成かつ再形成される』というもっと一般的な意味での史的唯物論であると、説明した。しかも、その一般的な史的唯物論こそが「構造化理論の基本的な教義を述べる中で私が支持しようとした見解に他ならない」(Giddens,1984=2015:279)、

そして、「むしろ、私としては、社会的実践は時間と空間へと食い込んでいくことを通して、主観と社会という客観の両者を構成する核心である。」(Giddens,1984=2015:10)(ここに「核心」と翻訳された言葉は原文では「root」だった、「root」という言葉は「核心」というよりむしろ「根」あるいは「基礎」を意味すると考えられる。)つまり、ギデنزも「実践」概念を二元論を克服する概念として使っており、この点について、ギデنزには完全にマルクスの実践概念を引き継いだと言えよう。

次に、「マクロな視角での歴史を作った過程としての実践」について、1971 年の「資本主義と近代社会理論——マルクス、デュルケム、ウェーバーの研究」の中で、ギデنزが「フォイエルバッハに関するテーゼ」について(基本的に第三のテーゼについてと考えられるが)、以下のように述べている。

「As Marx employs it “materialism” does not refer to the assumption of any logically argued ontological position. Marx undoubtedly accepts a “realist” standpoint, according to which ideas are the product of the human brain in sensory transaction with a knowable material world; ideas are not founded in immanent categories given in the human mind independently of experience. But this definitely does not involve the application of a deterministic philosophical materialism to the interpretation of the development of society. Human consciousness is conditioned in

dialectical interplay between subject and object, in which man actively shapes the world he lives in at the same time as it shapes him. This can be illustrated by Marx's observation, developing a point made in the Theses on Feuerbach, that even our perception of the material world is conditioned by society.」(Giddens,1971:21)。

この「構造の二重性」に関してギデンスは指摘している。すなわち構造は拘束でありながら能力付与でもあるという主旨と論理的に一致している、また、ギデンスが変遷に対する分析の中でしばしば強調する「(人間によって)作られた環境」とも関連している。1984年の「社会の構成」はギデンスの最後の理論を中心とした著作であって、ギデンスは「実際のところ本書は、しばしば引用されるマルクスの名高い一節に対する長々とした省察である、と言い表したとしてもあながち的はずれではない、マルクスによれば、「人間は歴史を作るが、しかしその環境を自ら選び取ることはない。」(CS p.9)と述べた。つまり、ギデンスがマルクスから引き継いだ歴史観は最初から最後まで一貫しており、さらに発展させられているのである。

最後に、「ミクロな視角での日々に反復されている実践」について、マルクスの影響と後期ヴィトゲンシュタインの影響とハイデガーの影響が共にある。

「私は、「言語論的転回」の、とりわけ解釈学的現象学や日常言語哲学が導入した「言語論的転回」の決定的な重要性を認めているが、この用語が若干の誤解をもたらすものであると考えている。社会理論に関してもっとも重要な発展は、言語へと転回したことではなく、発話(あるいは意味作用)と行為との相互作用をめぐる知見を変化させ、実践についての新たな考え方を提供したことにある。ハイデガーによって主導された解釈学ならびに現象学のラディカルな変革は、後期ヴィトゲンシュタインの革新とならんで、新たな道筋を示す二つの大きな里程碑となっている。」(Giddens,1984=2015:11)

この点について、具体的に、ギデンスの構造化理論の中の主体論や科学としての社会学に関する議論の中で展開されている。

つまり、ギデンスの社会観はこのようにまとめることができる:主体と客体両方とも実践の中で形成かつ再形成され、一刻も止まることなくずっと実践の中で変化していくものである。また、「人間行為者は何もないところから寄り集まって融合もしくは結合し、新しい統一体を形成するのではない。」(Giddens,1984=2015:206)こうした実践は決して個人の実践ではなく、複数の行為者が組成する集団の実践なのである。行為者らは実践を通して自然的世界を認識し、改造していくのである。この意味で、実践は時間の厚さと空間の幅を持った流れのような存在にほかならない。(ギデンスの時間—空間に関する観点は基本的に実践から理解することができるが、具体的に人類学の影響もみられる。)こうした実践の流れが歴史なのである。つ

まり、社会とは、決して社会実在論者や社会名目論者が言うような静止的なものではなく、時間—空間における、絶え間もなく動き出していく主体と主体によって対象化され変化されていく客体の運動的総合なのである。（ギデنزには「内的統一性をもった社会実体」というイメージを避けるためなどの原因で、「社会」の意味を歴史的にとらえる傾向がある。ここでは社会の存在論を課題としているので、ギデنزの用語に従っていない。）

そして、集団的实践は集団の諸メンバーの「実践によって出来上がった相互理解」を形成してきた。こうした実践によって出来上がった相互理解があつてからこそ、社会的世界は存在論的に保たれている。分析的に、こうした実践によって出来上がった相互理解は相互知識と常識と区別することができ、社会学の役割の一つは、常識を批判し、より良い社会を作り出していく、ということにほかならない。

ギデنزはこの実践を中心とした社会観に基づいて、構造化理論を構築したのである。こうした実践概念も、勿論構造化理論の中心に据えているのである。この点について、さらに次章の「構造化理論の基本的構成」の中で確認することができる。

ところで、ギデنزにはマルクスの実践概念を継承したとはいえ、マルクスの観点をさまざまなところで批判している。この点についても、次章で示す。

### 第3章 構造化理論の基本的構成

第2章で明らかにしたように、ギデنزの構造化理論の中心は、マルクスから引き継いだ実践概念がある。そこで本章では、構造化理論の構造、主体、相互行為、制度分析、社会的システムなどについて考察することによって、この主張をさらに明らかにする。その同時に、構造化理論は如何にして既存の社会理論の問題点を乗り越えたかということも示すことができる。なお、あらかじめ強調しておくが、ギデنزの言語観で言えば、言語は世界を記述するための道具ではなく、コンテキスト依存的、また限界があるもの他ならない。その意味で、ギデنزのテキストも論理的に理解するというより、意味的に理解することが大切である。

#### 第1節 構造化理論における構造

まず、構造概念について考察しよう。構造概念について、「社会の構成」の中でこのように述べている。

「構造化理論において『構造』は、社会的再生産に再帰的に関わる諸規則と諸資源だと見なされている。社会的システムが制度化されている時、社会的システムは、時間と空間を越えて関係が安定化されるという意味における構造特性をもつ。」(Giddens,1984=2015:20)、

「社会分析において構造とは、社会的システムに時間一空間を『接合する』ことを可能にする構造化特性、すなわち、類似性をもつと認められる社会的慣習が多様な時間と空間の範囲を越えて存在することを可能にし、それに『全体的』な形式を与える特性、ということになる。構造が変換関係の『ヴァーチャルな秩序』であるというのは、次の二つのことを意味している。すなわち、再生産された社会的慣習としての社会システムが『諸構造』をもつのではな『構造特性』を示すということ、そして、構造は、社会的慣習のなかに具現化した場合のみ、知識をもった行為者のふるまいを方向づける記憶の痕跡として、時間一空間に現前するということである。」(Giddens,1984=2015:44)

一見した限りではかなり難しい概念であるが、ギデنزがいつも強調した「反復された実践」から考えれば一目瞭然な概念である。つまり、実践が反復されるということは、実践が完全に再現されるわけではない、再現されるのは、時間と空間においての何等かの要素だけである。その要素らは「構造化特性」、

いわゆる「構造」ということである。この点について、ギデنزはよくソーシャルのパロール (parole) とラング (langue) との関係で説明する。簡単に言えば、ソーシャルのパロールは個人の具体的な言語行為のことを意味し、ラングはそれを可能にした記号体系である。ソーシャルの表現で言えば、ラングは「言語能力の社会的所産であり、同時にこの能力の行使を個人に許すべく社会団体の採用した必要な制約の総体である。」(Saussure 1972 p.21)、つまり、実践と構造はだいたいパロールとラングと対応しているのである、そして、ラングと同様、構造も具体的に物質的な存在ではなく、時間一空間における社会实践の中で貫通されている全体性をもつ抽象的な体系である。「ヴァーチャル」というのはそのためである。

この点について、ギデنزは 1997 年のインタビューの中で、以下のように説明した。

「多少限定された範囲の中で言えるのですが、言葉話すことは、構造と行為能力の関係について、何か重要な点を私たちに示しています。言い換えれば、言語は構造を有しており、言語は形式を有しているとはいえ、目に見えないものであり、さらに言語は、人々が言語を日々使用する中で行うことがらの重要な要素を実際に形作る限りにおいて、初めて『存在』できる。それは、私が、言語の繰り返し特性と名付けるものです。私は、構造主義者がつねにしてきたような、社会が「言語に似ている」と主張したかったのではありません。言語は、繰り返しがどのように生ずるのかについて、重要な手がかりを私たちに与えている、と私は主張したのです。私たちは『社会』を、制度体を形成する反復的实践の複合体として、理解することができます。このような反復的实践は、一人ひとりが身に着ける慣習や生活形式に依拠します。一人ひとり、自分たちの活動の中でこれらの慣習や生活形式をたんに「利用」するだけではなく、こうした生活上の実践が、その活動内容を組成していくのです。」(Giddens and Pierson, 1998=2001:120)

「社会や社会システムの構造特性は、現実の特性です。しかし、同時にまた、構造特性は、物理的に存在性を有していません。構造特性は、それらが、人々の行為の持つ定型的特質に依拠しており、また極めて固定化されたり「堅固な」ものになる可能性があるという意味で、現実の特性です。私は、社会が構造化された現象であり、集団なり社会の構造特性が人々の行為の仕方や感じ方、考え方に影響を及ぼすとしたデュルケム学派の主張を排除しようとは思いません。しかし、これらの構造が何であるのかを検討すれば、構造は、明らかに外的世界の物理特性のようなものではありません。構造は、社会的再生産の規則正しさに依拠しています。言語は、このような信じがたいほど固定化された

形式を有しています。たとえ明らかに最もとるに足らない英語の言語規則であっても、他の話し手から非常に強烈な反発を受けずにその言語規則に逆らうことは誰にもできません。しかし、同時に、言語はどこにも存在しない。つまり、言語は、言葉を書いたり話したりする際の言葉の具体的例示の中にのみ存在するのです。ほぼ同じことが、社会生活全般についても当てはまります。つまり、人々の行うことがらの中に構造が生産され、その構造が再生産されていく限りにおいて、社会は初めて形式を持ち、形式は初めて人々に影響を及ぼしていく。」(Giddens and Pierson,1998=2001:121)

つまり、パロールが反復されることでラングが現れると同様、実践が反復されることで構造が現れるのである。さらに、実践の反復の中で、ヴァーチャルであるが存在論的な意味で実在するのである。その実在性をさらに突き止めれば、「構造は、社会的慣習のなかに具現化した場合のみ、知識をもった行為者のふるまいを方向づける記憶の痕跡として、時間一空間に現前するというものである。」(Giddens,1984=2015:44)、つまり、ラングと同じ、構造は、一つの社会的システムにおけるすべての行為者の記憶の痕跡の総合の中に存在するのである。

ここでは、ギデنزと構造主義者との区別を確認しなければならない。ギデنزが指摘したように、「行為主義者は伝統的に、諸構造をある集合において許容される諸変換のマトリックスを見るか、それともそのマトリックスを制御する変換の規則とみるかについて、曖昧さを残り続けてきた。」(Giddens,1984=2015:44)つまり、構造は変換していく行為者の能動性を無視するゆえに、構造を変換させる原動力をも構造の内容物として構造自身へ帰結する。そのため、構造主義者の場合は構造は曖昧さが残り続けてきた。ギデنزは「私の言う構造は、少なくとももつとも原理的な意味において、後者のような規則（と資源）である。だが、「変換の規則」と言ってしまうと誤解を招きかねない、というのも、すべての規則が本質的に変換可能性をもっているからである。」(Giddens,1984=2015:44)と、この問題をあきらかにしたのである。そして、構造は「変換の規則」だと定義するならば、ギデنزの「権力」という観念と関わっていると考えられる。ギデنزによれば、「「別様に行為する」能力があるということは、世界に介入する、あるいは介入を控えることで、ある事態の特定のプロセスや状態に影響を及ぼしていく能力がある、ということの意味している。ここで前提とされているのは、行為者であるならば、因果的権力——他者が利用する権力を与える権力も含めて——を一定の範囲にわたって（日常生活の流れの中で持続的に）利用することができる、ということである。行為の基礎には、ある事態の既存の状態や出来事の既存の流れに対して「差異を作り出す」個人能力がある。ある行為者が行為者でなくなるのは、「差異を作り出す」

能力、すなわち何らかの権力を行使する能力を喪失したときである。」(Giddens,1984=2015:41)「行為には変換力という意味での権力が論理的に内包されている」(Giddens,1984=2015:42)、また、ギデنزは「第一に、複数の慣習がルーティン的に交差しあっている地点、つまり構造的関係における「変換点('transformation points)」を研究すること。」(Giddens,1984=2015:20)と構造化理論によって考察すべく方向を述べたことがある。実践を「transformation points」としている。つまり、主体は変換力を持っている、構造は変換の規則として主体に利用される同時に主体を拘束する、その変換のポイント(transformation points)は実践で、すなわち実践の中でこの変換が成し遂げる、ということである。

こういった構造概念を理解した上で、構造の二重性は初めて理解することが可能になる。周知のように、ギデنزの構造の二重性とは、構造は拘束的かつ能力付与という二つの側面があるということである。この点について重要なのは、行為者と構造は二元論的に扱わないのは、実践の中で統合されているからである。それゆえに二重性として扱うべきだ。

「行為者の構成と諸構造の構成は二つの独立した現象、つまり二元論ではなく、二重性を示している。構造の二重性という考え方に従えば、社会的システムの構造特性は、それが再帰的に組織化する慣習(practices)の媒体かつ結果である。構造は個人にとって「外的」なものではない、記憶の痕跡としての、社会的慣習(social practices)に具現化されるかぎりでの構造は、ある意味で個人の活動にとって「内的」なものであつて、デュルケームが言うような活動の外部に存在するものではない。構造は拘束と等置されるべきものではない。そうではなくて、構造は常に拘束的かつ能力付与的なものである。」(Giddens,1984=2015:53)

つまり、構造は「変換の規則」であるゆえに、閉鎖されることなく、ずっと開放性を持っているということである。したがって、実践はたんなる既存の構造を再現するだけでなく、構造を変換することもある。しかしながら、その変換は決して恣意的なものではなく、構造が許容する範囲の中で変換するものであるゆえ、拘束的な性格ももっている、構造二重性というものは、こういうことを意味するにほかならない。

また、構造の具体的な内容について、ギデنزは「規則」と「資源」と以下のように説明している。

「構造化理論において「構造」は、社会的再生産に再帰的に関わる諸規則と諸資源だと見なされている。社会的システムが制度化されている時、

社会的システムは、時間と空間を越えて関係が安定化されるという意味における構造特性をもつ。「構造」は規則の二つの位相——規範的要素（normative elements）と記号化のコード（codes of signification）——として抽象的に概念化することができる、同様に、資源にも二つの種類ある、つまり、人間行為者の活動を調整することによってもたらされる権威的資源と、生産物あるいは物質的世界の諸位相を制御することによってもたれされる配分的資源である。」（Giddens,1984=2015:20）」

上記に示したように、規則の二つの位相は、すなわち規範的要素と記号化のコードは、それぞれのルーツがある。規範的要素はパーソンズ流の社会学から引き継いだのであり、記号化のコードは理解社会学の伝統から引き継いだのである、また、資源の二種類は、マルクスに対する反発として、また資本主義と産業主義の融合として、理解することができる。

この規則の両面性について、ギデنز氏は「（１）チェスのチェックメイトを定義している規則とは……である」「（４）全労働者が午前８時に出勤することが規則である」という二つの用例で説明した：「私としては、（１）と（４）の用例が表現しているのは、規則の二つの位相であって、規則の相異なる二つの類型ではない、と言っておきたい。たしかに、（１）の用例はチェスの本質の一部であるが、チェスをする者にとってはサンクションを課せられるという規則的特性をもつことになる。つまり、（１）は遊戯の遵守されるべき位相にも言及しているのである。これに対して、（４）の用例にも構成的な位相が含まれている。たしかに、それは「労働」の本質を定義してはいないが、「産業的官僚制」のような概念の定義には入り込んでいる。このように、（１）と（４）の用例によってわれわれの関心は、規則の二つの位相——意味構成において規則が果たす役割と、規制とサンクションの強い結びつき——に向けられることになる。」（Giddens,1984=2015:47）と説明した。

資源の二種類について、ギデنز氏によれば、ある種のマルクス主義と産業社会論の批判的融合である、ある種のマルクス主義の「支配はまず第一に、何よりも配分可能な資源（財産）と結びつけている」という観点に対して、産業社会論は「認証は配分に還元されてはいない。しかし、ここでは逆に、配分は認証の特例だと見なされるのである。」（Giddens,1979=1989:110）。こういった二つの観点に対して、ギデنز氏はそれを批判的に融合させ、権威的資源と配分的資源へまとめた。

構造化理論の構造論の全体から見れば、従来の構造概念に対しての「科学化」が問題意識の一つだと言えよう。ギデنز氏は、機能主義の構造概念は認知的プロセスにおいて正当性が欠けていると批判し、「有機体の骨格や形態学、あるいは建物の梁」のような構造概念を捨て去り、構造を最初から定義しなおした。

「社会分析において構造とは、社会的システムに時間－空間を「接合する」ことを可能にする構造化特性、すなわち、類似性をもつと認められる社会的慣習が多様な時間と空間の範囲を越えて存在することを可能にし、それに「全体的」な形式を与える特性、ということになる。構造が変換関係の「ヴァーチャルな秩序」であるというのは、次の二つのことを意味している。すなわち、再生産された社会的慣習としての社会システムが「諸構造」をもつのではなく「構造特性」を示すということ、そして、構造は、社会的慣習のなかに具現化した場合のみ、知識をもった行為者のふるまいを方向づける記憶の痕跡として、時間－空間に現前するということである。」(Giddens,1984=2015:44)

こうした構造概念は、完全に自然主義や機能主義の文脈と切り離し、マルクスの実践の社会観に基づいて提出されたものに違いない。こうした「反復されている実践の中で再現される諸要素」を意味する構造化理論の構造概念が、実践を中心とする社会観を分析し獲得した概念として、自然主義と機能主義の構造概念より明らかに科学性が高い。

一つ強調しておきたいのが、構造概念は時間における構造化特性だけではなく、空間における構造化特性をも包含する。すなわち、構造化特性が空間の次元にわたって拡張しているという意味で、社会的システムの支えになるのである。ギデنزの構造化理論は、機能主義を完全に反対する立場として、社会を実体としてとらえようとはしない。そして、社会的システムはいかにして全体性を持つかという問題に対して、構造化理論では、「空間における構造化特性」と回答するのである。その意味で、構造概念はパロールとラングへ例えてその全体性を説明することができる。

## 第2節 構造化理論における主体

主体性について、ギデنزによれば、「社会科学や他の分野における主観主義的なアプローチがもつ問題点のひとつは、主観性が解明されるべき現象ではなく、所与のものと考えられることにある。」(Giddens,1987=1998:91)、つまり、前節で述べたように、ギデنزの構造化理論の主体論は実践の中での主体という基本的視点から展開されるのである、実践なしには主体は主体になれない、あるいは、潜在的な主体にすぎない。さらに、主体性の一番重要な内容は権力——行為者の場合、権力は「差異を作り出す能力」を意味する。なぜなら、「権力は主観性に、つまり行動の反省的モニタリングの構成に論理的に先行する」(Giddens,1984=2015:42)。

こういった視角で、ギデنزの 1984 年の「社会の構造」の中で、(社会的な)主体の行為論と(心理学的な)パーソナリティ論を提起した。具

体的に、行為者階層モデルとパーソナリティ階層モデルという二つの図式で説明されている。

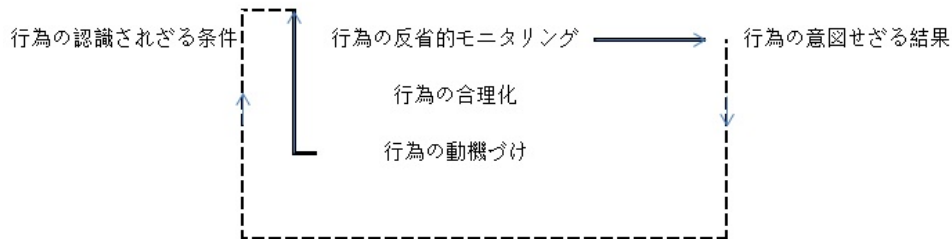


図1 行為者階層モデル(Giddens,1984=2015:31)

この行為者階層モデルは一見した限りではかなり明快なものであるが、ギデنزの概念図式の全体の中から考えれば極めて複雑なものである。なぜなら、この図式の要点は、この図式自身はほとんど説明していない。この図式に関する諸観点ほとんどは1976年の「社会学方法の新しい基準」の中で形成されているのである。「社会学方法の新しい基準」の中で、ギデنز現象学社会学、エスノメソドロジー、ポスト・ヴィトゲンシュタイン哲学などの諸潮流を批判的に融合させ、既存の諸概念の再定義するとともに、斬新な行為者像を描いた。したがって、それらの諸概念とそれらの間の関係を把握しないかぎり、この行為者階層モデルを把握することも不可能である。それゆえに、ギデنزの行為者に関する諸概念とそれらの間の関係から確認しておきたい。そして、その諸概念とそれらの間の関係を明らかにすることによって、ギデنزの主体論の基本的図式も明らかになると考えられる。

まず、ギデنزの行為者像は、基本的にシュッツの影響を受けている。「行為は「生きられた経験」の淀みない流れである。行為を個々別々の部分や「断片」に分類することは、その行為者が払う注意の再帰的過程に、あるいは他者による注視に、依拠している。」(Giddens,1993=2000:137)つまり、簡単にいえば、行為者の行為には二つの状態がある。いわば進行状態と途切れ状態である。進行状態において、行為者は目の前の状況に集中し、自分自身のことを反省的に考えることはあまりない。他者に聞かれたり自分に反省されたりする時に、すなわち途切れ状態においてのみ、自分の行為を断片的に分類するようになる。

次に、哲学でも社会学でもよく使われている「意図」や「目的」概念について、ギデنز以下のように説明した。

「英語の日常語法では、「意図 (intention)」と「目的 (purpose)」の違いを認めているが、私は、両者を同義語として用いた。日常語法では、「目的」は、「意図」と異なり、現象学的意味合いで全面的な志向性を示す言葉ではない。私たちは、人が「目的があつて」あるいは「目的のために」行為するという言い方をする。「目的」は、意図がそうではないという意味で、「決心」や「決意」と関係しているように思える。そのことは、意図という言葉が日々の営みにむしろ限定されるのにたいして、私たちには長期に及ぶ抱負を指称するために「目的」という言葉を用いる傾向があることを暗に意味している。とはいえ、私は、そうした長期に及ぶ（例えば、本を書き上げるといった）抱負を指称するために「企て (project)」という用語を使いたい。」 (Giddens,1993=2000:138)

「とはいえ、意図にしても企てにしても、それを——あたかも行為者は自分の達成しようとする狙いを自ら認識しなければならないかのように——目標に向けて《意識的に心にいだいた》方向性と同一視するべきではない。日常的行動を組成する行為の流れは、ほとんどがその意味で前・再帰的である。けれども、目的は、明らかに「知識」を前提としている。私は、《行為体が行いによって一定の特質なり結果を示すことが期待できると認識（確信）しており、また行為者がこの認識をそうした特質なり結果を生み出すために利用する行い》をすべて、「意図的」行い、ないし「目的的」行いと定義づけたいと思う。」 (Giddens,1993=2000:139)

「「意図」と「目的」の用語そのものは、行為者の生活活動の絶え間ない変化を、幾筋かの意図された結果に明確に切り分けることを暗に意味しているため、かなり紛らわしいというよりも、むしろ簡単に誤解を招きやすい。しかし、人は、ごく稀な状況でしか——例えば、試合を行っている間じゅう、完全に自分の注意を引きつける競技種目に勝利することに心血を注ぐときのように——無条件で一つの方向に精魂を傾けるような、明確な「狙い」を心にいただくことはない。そこ意味では、「意図的」や「目的的」という形容詞形の方が、「意図」や「目的」という名詞形よりも的確である。日常的行為の目的内容は、《行為者による、みずからの活動の継続した首尾よい「モニタリング」のなかに》ある。このことは、行為者が、通常、当然視する日々の出来事の経過を何気なく統御していることを暗に示している。行為者にたいしてその人がおこなうことがらの目的を問うことは、問題となる出来事の経過にたいするその行為者の関わりを、その行為者自身が、どのような仕方、またどの側面からモニターしているかを問うことである。人間の生活活動は、併存された個々別々の目的や企てから成り立つのではなく、他者との、

また自然界との相互作用における目的的活動の連続した流れから成り立っている。もっと一般的に言えば、行いの同定と同じように、「目的的行い」を、その行為者は再帰的にしか把握できないし、他の行為体は概念的にしか取り出すことができない。まさにこうした見地から、私がさきに「目的のヒエラルキー」と称したことがらを理解しなければならない。人間という行為体は、自らの活動を多くの異なる同時に発生的な流れとしてモニターできる。こうした活動の流れのほとんどは(シュッツがいうように)どの時点でも「平衡状態に保たれる」が、行為者は、これらの活動の流れを、突然生ずる個別の出来事や状況に有意関連するものとして思い出すことができるという意味で、この活動の流れを「自ら認識している」。(Giddens,1993=2000:150)

ここの「前・再帰的」というのは、英語では「pre-reflective」、つまり、ここでは「前・反省」や「前・熟考」を意味すると考えられる。「平衡状態に保たれる」というのは、英語では「held in stasis」、文脈から考えれば「(呼び出されていない) 静止的な状態に止まる」を意味するのである。つまり、行為者は基本的に日常生活の中で、「他者との、また自然界との相互作用における目的的活動」をしている、かつそれを直面、専念している。その意味で、行為は「流れ」となる。さらに、この流れは常に意図や目的に影響されているわけではない。

さらに、「理由」について、理由は「合理化」、「反省的モニタリング」などの概念と直接関係している。ギデنزによれば、「……前略……「理由」を行為の根底にある原理として定義づけることが可能であるが、行為体は、こうした原理に対して、自分たちの行動を再帰的にモニターする際の決まりきった要素として「接触をつづける」。……中略……「傘をさす」は、行いの特性描写である。ある人が傘をさす際の意図は、おそらく「濡れないため」であると表現できるし、また傘をさすことに対して示される理由は、頭上にかかげる適切な形状の物体が降雨を防いでくれることを知っているからであると表現できる。したがって、「行為の原理」は、個々の行いの同定によって明示されるような一定の結果を達成するために、なぜある「手段」が「正しい」、もしくは「相応な」、「適切な」手段になるかについての説明を組成していく。」(Giddens,1993=2000:152)つまり、理由というのは、自分の行為を相手に理解してもらうための説明である。そして、理由づけというのは明らかに行為の流れの一部としているわけではない。したがって、「ある行いの理由をとすることは、行為の流れの中に概念的に切り込むことであるが、行為の流れは、それがこうした一続きの「意図」をとともなわないのと同じく、並置された個々別々の「理由」をとともなうわけではない。」、さらに、理由は相手に理解してもらうための説明であるゆえに、傘をさすと雨に濡れないような

共同認識が必要となる。その共同認識について、ギデنزは客観的な因果関係、すなわち事象因果性に基づいているとは主張しない、その共同認識は主に再帰的モニタリングによって認識された行為が引き起こす結果、すなわち行為体因果性であるとギデنزが主張する。この行為体の再帰的モニタリングによって可能になった行為をコントロールする性質は、まさにギデنزの主体の「自由」であろう。

最後に、「動機」について、「私は「動機づけ」という用語は、行為を誘発する《欲求》を指し示すために使いたい。動機づけと、パーソナリティの情緒的要素との結びつきは、直接的結びつきであり、両者の結びつきは日常の語法でも認められている。動機は、多くの場合に——恐怖、嫉妬、虚栄心、等々の——「名称」をもち、同時にこれらの名称は、一般的に情動の名称とみなされている。」(Giddens,1993=2000:155)「行為の反省的モニタリングと行為の合理化は行為の動機づけから区別される。理由が行為の根拠であるとすれば、動機づけとは行為を引き起こす欲求のことである。だが、動機づけは、行為の反省的モニタリングや合理化と比べると、行為の継続性との結びつきが直接的ではない。動機づけとは行為の可能性を指す言葉であって、行為が行為者によって持続的に維持されていく様式のことではない。動機が行為に直接的な影響を及ぼすのは、どちらかといえば非日常的な場面、すなわち何らかの原因でルーティンが途切れてしまう場面に限定される傾向である。たしかに、動機を与える全体的な計画あるいはプログラム——シュッツの言葉でいえば「プロジェクト」——の範囲内で、一定の振る舞いが遂行されている。しかし、われわれの日々の振る舞いのほとんどは、直接的には動機づけられていないのである。」(Giddens,1984=2015:32)「私がおこなう動機づけという言葉の用法のように、この用語は、行為者が自分の欲求に気づいている場合だけでなく、意識には接近できない源泉によって行動が影響を受ける場合をも網羅している。フロイト以降、私たちは、こうした接近不可能な源泉の暴露に行為体が積極的に抵抗する可能性についても、あらかじめ考慮しなければならない。」(Giddens,1993=2000:156)

以上の諸概念とそれらの間の関係を確認した上で、ギデنزの行為者階層モデルを議論することができる。この行為者階層モデルが描いたのは、反省能力を使い、再帰的モニタリングをしている最中の行為者である。なんともいっても行為を流れとして扱うゆえに行為の「最中」という状態とそれと関連することがらは概念化できないからである。したがって、現状に応じて知識を活用するということを暗に意味する意図や目的も、この図式には入れない。

また、図の中で、上から下へ、行為の再帰的モニタリング・行為の合理化・行為の動機づけという順番で並ばれている、この並び方は以下のように

理解することができる：再帰的モニタリングは常に作動している、自分の行為の流れの中で、自分の行いが何をもたらすかそれを因果的に理解し、自分の行為を監視しコントロールする。再帰的モニタリングから得られた知識が社会的でありながら理論的でもある、こういった知識が行為の合理化に使われるゆえに、また意図や目的を達成するために、常に行為の流れの中にいる行為者に援用される。動機づけは行為を引き起こす欲求、意識されるかどうかに関わらず行為の流れへ間接的に影響を及ぼしている。つまり、上から下へ行為の再帰的モニタリング・行為の合理化・行為の動機づけというのは、行為の流れとの関係性が減少していくという順番で並べられているのである。また、再帰的モニタリングによって、行為者の意図せざる結果は常に認識されざる条件への学習と繋がる。つまり、行為者は常に自分の行いから学習していく行為者である、とはいえ、行為者は自分の意図せざる結果の全てを学習できるわけではない、その例の一つとして、社会システムの再生産はほとんど行為者の意図せざる結果によって成し遂げられるのである。

意図せざる結果と社会システムの再生産との関係について研究する道は、K・マートンが開いたのである。マートンは、周知のように、行為者が目指している結果を顕在機能として、またその裏にある社会システム再生産のメカニズムを潜在機能として、二つの機能を区別してとらえることを主張する。こうすることによって、一見したかぎりでは不条理な行いでも社会システムの再生産にとっては実は重要であることを主張することができる。しかしギデنز言わせれば、行為者の意図せざる結果をその行いの機能として扱うのがあまり適切ではない、この問題について、以下の四点を指摘する必要がある。

第1に、社会的システムの再生産は意図せざる結果によるのではなく（そもそも人間は自分の意図せざる結果のために行うことは不可能である）、逆に主に意図される結果によるのである。第2に、意図せざる結果は機能的結果と解釈する必要がない。つまり、「社会活動——目的的行為——行為の意図せざる結果」は「社会活動——機能的必要——機能的結果」と解釈する必要がない。「意図せざる結果は社会的システムの再生産を成し遂げた」という事実をそのまま扱えばもう十分である。第3に、機能主義的説明は何かを説明したというより、むしろ新しい課題を提示したと言った方が適切である。第4に、行為者の学習によって（二重の解釈学によって）、意図せざる結果は永遠に意図せざる結果として存在するわけではない。

つまり、ギデنزのは、機能主義を乗り越えると主張するが、機能主義者が提示した行為者の意図せざる結果と社会システムの再生産との関係は紛れなく事実である、意図によって行われた実践がいかにして社会的システム

再生産を成し遂げたのかが研究すべき問題である。

こういった主体の行為論の展開は、もう一つの図式を暗に提示している、すなわち主体のパーソナリティ階層モデルのことである。

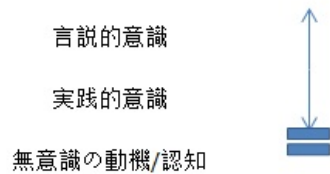


図2 パーソナリティ階層モデル(Giddens,1984=2015:33)

このパーソナリティ階層モデルはフロイトの自我、超自我、イドという伝統的な精神分析の図式を批判的にとらえたしたものとして提示されたものではあるが、フロイトの図式と比べれば、問題意識も諸概念の定義も図式の構成もかなり異なっているものである。

フロイトの図式と対照して言えば、言説的意識と実践的意識は「意識」の範囲に属するが、この「意識」はフロイトのいうような心理学的な概念というより、ギデنزの「意識」概念はむしろ社会学あるいは現象学的な概念である。その点を把握するために、行為の流れの中にいる行為者の「記憶」から議論しなければならない。

行為の流れとしてとらえる立場から考えれば、「記憶」は普通に考えるように「過去」と「現在」の区別に依拠し存在しうるものではない。なぜなら、「「現在」は語られ記述されるときには常に過去へと溶解していく。」(Giddens,1984=2015:73)つまり、行為の流れの中では、「過去」と「現在」ははっきり切り分けられるものではないのである。

「かりに「現在」が行為の流れから切り離せないものだとしたら、「記憶」は人間行為者の知識能力を記述する方法に他ならないと言えるだろう。記憶が「過去の経験」を目指さないのならば、意識が「現在」を表現することもない。人間が「意識する」対象をある特定の地点に固定化することは不可能なのである。したがって、感覚的把握としての意識、意識の時間的構成としての記憶、そして、過去の経験を行為の継続性集中させるように過去の経験をまとめ上げる手段としての回想を区別する必要がある。記憶が人間の経験に内在するこうした時間の統制を意味するならば、言説的意識と実践的意識は、行為のコンテクストにおいて動員される回想という心理学的機構を意味

することになる。言説的意識からは、行為者が言語によって表現できる形式の回想が暗示される。これに対し、実践的意識が関わる回想には、行為の持続において何かを「知っているのか」を行為者が表現することができなくても接近していくことができる、無意識的なものは行為者が直接的には接近することのできない回想を意味している。というのも、行為の反省的モニタリングの内部、もっとも正確に言えば、言説的意識の内部には、行為者の非媒介的な介入を抑制する、いわば否定の「遮断棒」のようなものが存在しているからである。」(Giddens,1984=2015:77)

つまり、言説的意識でも実践的意識でも、行為の流れの中にいる行為者が都合に合わせて動員する経験の回想のことである。さらに、言説的意識と実践意識との間にははっきり区別できるわけではない、相互浸透的な関係なのである。

ギデنزによれば、言説的意識、実践的意識、無意識はだいたいフロイトの意識、前意識、無意識と対応するのである、とはいえ、ギデنزの実践的意識という用語は 1976 年の「社会学の新しい基準」の中ですでに暗示されているということから考えれば、フロイトの理論は概念形成に影響を与えているのではなく、無意識と意識との区別、図式構成に影響を与えていると考えられる。したがって、ギデنزのこういったパーソナリティ階層モデルはフロイトの精神分析の線へ帰結することができなく、哲学や社会学などの領域で生かされるモデルだと考えられる。

しかしながら、このパーソナリティ階層モデルを理解するのに、マルクスからの実践概念を参照しなければならない。そうしなければ、誤解が生じてしまう。関口俊之のギデنزの相互行為に関する議論はまさにそうである。(関口,2002)

周知のように、パーソンズの相互行為論においてダブル・コンティンジェンシー (double contingency) は核心的な概念である。ダブル・コンティンジェンシーというのは、相互行為が行われる際に、行為者 A は何の行為をするかそれは A 自分で決められる問題ではなく、相手 (行為者 B) の行為に依拠している。しかしながら行為者 B も同じ問題を直面しているゆえに、ある共通的な価値基準が存在しなければ、行為者 A と行為者 B が何の行為も行えず理論的なジレンマに陥ってしまう、という理論的な問題である。この問題に対して、パーソンズはその共通的な価値基準が教育によって内面化され、行為者のパーソナリティの一部として取り込まれる、そうすると、互いに相手の期待を期待できるようになるという解決策を提出したわけだが、パーソンズ以来、その解決策を受け止める社会理論家はほとんどいないというのが現状である。

関口は、こういったダブル・コンティンジェンシーについてギデنزの構造化理論ではどのように答えるか、その答えは問題解決になるかこの二つの問題を巡って議論を展開した。関口によれば、ギデنزもパーソンズと同じように「共通的な価値基準」を提示した：「ギデنزに従えば、すべての行為は何らかの資源動員による意思実現の試みと解釈できるだろう。つまり相互行為という事態に関するギデنزの記述は、構造が行為に対して拘束態であると同時に可能態であるということ、そして二重の条件依存性が主体の持つ現実変革能力、すなわち「行為能力」を原資として展開されるという二点に特徴を持つ。「構造」は自己が行為選択をする際に相手の出方について考えることを可能とする。同様にこの作業は相手においても行われているだろう。これがすなわち「期待の相補性」と呼ばれるものである。」そして、パーソンズの理論の重大な欠陥——共通的な価値基準いかにして可能かという問題に対して、「パーソンズと同様にギデنزも、有効な答えを示せていないということが理解できる。確かにギデنزは「行為は内面化された規範的命令が生み出すもの」ではなく、仮にそのように見地に立てば、「現実の行為哲学をパーソンズ流の行為の準拠枠へと撤退させてしまうことになる」とし、「価値の内面化」概念から距離を取る姿勢を強く打ち出してはいる。しかしその意味するところは、行為に際して用いられる相互知識につて、「行為者は明示的な形で知っているわけではない」ということに尽きるのであって、結局のところ行為が「言説的意識」に基づいているのか、あるいは「実践的意識」に基づいているのかという単なる区分の導入に過ぎない。」（関口,2002）、「ギデنزはパーソンズを乗り越えていない」（関口,2002）と述べた。

実は「社会学の新しい基準」の中で、ギデنزは既にこのダブル・コンティンジェンシー問題について結論を下した：「いずれの行為者も、相手が相応な能力の行為者であれば、自分がその相手に発言を行う際に、想定したり当然視し、さらにまた自分でもそう想定していることを相手が承知していると当然視する、そうしたことがらは数多く存在する。このことは、「他者が知っていることを自分が知っていることを他者が知っていることを自分が知っている……」といった別の無限後退を導入するものではないと、私は確信する。「自分の知っていることを他者が知っていることを自分が知っている……」というかたちの無限後退は、当事者が互いに何とかして相手の裏をかいたり、出し抜くことに専心するポーカーゲームのような戦略的状況において、起こるだけである。この場合の無限後退は、哲学者や社会学者を悩ます論理上の問題ではなく、むしろ行為者にとっての実践的課題である。（Giddens,1993=2000:162）」

また、「共通的な価値基準」を議論する際に関口俊之が持ち出したクリブ

キの「規則のパラドックス」問題、いわばソール・A・クリプキによるルートヴィット・ヴィットゲンシュタインの「哲学探究」の解釈の中で提示した「規則は先験的に確保することが困難であるゆえに、個々の人間は同じ基準に従って行為を行っているというのがほぼあり得ない。」という問題についても、ギデنزの主体論の中で一つの課題として取り上げていないが、実践が回答であるという意味で間接的に答えを提示したのである。

ダブル・コンティンジェンシーについてギデنزが構造化理論の中で提示したポイントを、筆者は以下の三つへまとめることができると考えられる、そして、実践概念と関連して関口の結論と違ってギデنزには既にダブル・コンティンジェンシー問題を解決したと主張する。

第1、すでに議論したように、行為は意図や理由などに分解されるものではなく、流れなのである。行為の流れの中で行為者が「これから何の行為を選択するか」という問題を抱き続ける可能性があるというより、むしろ実践的意識によって意識しているかしていないかの間に動き出してしまう可能性が高い。

第2、相互行為が行われる時でも、「共通的な基準」が存在し互いに前もって相手の期待を期待しているというより、むしろ互いに相手の行為能力をモニターしつつ、自分なりに行為する可能性が高い。行為能力について、ギデنزの一つの課題として取り上げていないが、行為の反省的モニタリングと行為の合理化の説明の中で説明されている。

「行為の反省的モニタリングは日常の行為がもつ持続的な特性であり、自らの行動はもとより他者の行動まで関わっていく。言い換えれば、行為者は自己の行動の流れを継続的にモニターし、他者に同様のことを期待するだけにとどまらず、自らの行動が行われるコンテキストの社会的ならびに物質的様相をもルーティン的にモニタリングしているのである。行為の合理化とは、行為者が——またしもルーティン的に、そしてほとんどの場合は、何の支障もなく——自らの行動の根拠についての「理論的理解」を途切れることなく維持している、ということである。すでに述べたように、こうした理解をもつということが、特定の行為に対して言説によって理由を提示することと等置されてはならないし、ましてや、そうした理由を言説によって特定する能力を持つことと等置されてはならない。しかし、行為能力をもつ行為者が他の行為者に期待している——そして、能力の有無を判断する重要な基準として日々の活動の中で採用されている——のは、行為者であれば一般的に、そのふるまいのほとんどについて、求められたときには説明を提示することができる、ということなのである。哲学者たちが意図ならびに理由

について何度も提起してきた問いを一般の行為者が取り上げるのは、通常、行動の一部が明確な困惑を呼ぶものである時か、あるいは、能力の「失効」や裂け目——実際には意図的になされることもある——が存在しているときかのいずれかである。したがって、われわれは、他者が自らが属している集団ないし文化にとって慣習的な活動を行っているとき、その人物になぜそうしているのかを問いかけるようなことを普通ならしないものである。さらに、行為者には責任がないと思われる失効、例えばぎこちない動きや言い間違えが生じたとしても、やはり普通なら説明を求めたりはしない。かりにフロイトが正しければ、こういった現象にも合理的な根拠があるのもかもしれない。しかし、しくじりを犯した者も、それを目撃する他者も、このような合理的な根拠を認識することはほとんどないのである。」(Giddens,1984=2015:31)

また、共通的な価値基準の問題は、規範の説明の中で説明されている。

「相互行為の規範的要素の中核にあるのは、相互行為の一定のコンテキストに参入している人物に対して「期待」される権利と義務との関係にほかならない。例えば、行動の形式的コードは一般的に、(少なくとも現代社会における)法律に保証されている形式的コードに見られるように、権利と義務の関係にある種の対称性が要求されることを表現しており、権利と義務は互いが互いを正当化する関係になっている。だが、このような対称性は、実際には必ずしも存在していない。この点を強調しておくことは重要である。なぜなら、パーソンズの「規範的機能主義」やアルチュセールの「構造主義的マルクス主義」は規範的義務が社会成員によって「内面化」される程度を過大評価しているからである。どちらの立場も行為の理論を取り組み入っていないため、人間が知識能力を持った行為者で、相互行為の流れを反省的モニタリングする存在であることを認識していない。社会的システムが主として「社会という客観」の視点から把握されるとき、規範によって調整された正統的秩序の全面的影響が、社会行動の完全なる決定因すなわち「プログラマー」として強調されるようになる。こうした視点が覆い隠しているのは、社会的システムの規範的要素が偶発的な要求であるという事実である。そうした要求は現実の出会いのコンテキストにおけるサンクションの効果的な動員を通して維持され、「重視」されなければならないからである。規範的サンクションは支配の構造的非対称性を表現しており、名目上であれ規範的サンクションに従っている人々の間に成り立つ関係は、当の規範が生み出していると想定されるコミットメントの表現にとどまらない多様な種類の関係がありうるのである。」(Giddens,1984=2015:58)

つまり、日常生活の中で、行為者が相手の行為に違和感を感じる時に、理由を聞いたり注意したり嫌で離したりするのが普通のやり方であるし、さらに相手を「変人」へ帰属し相手の行為能力を認めないことをする可能性さえある。場合によってこういった行いによって行為者が相互的に勉強しその時点で歩調合せていく、ということである。共通的な価値基準は実践の中では必要とされていない。実践のメカニズムはかなり便益を図っているという意味で、実践しているすべての行為者は融通を利く行為者である。

第3に、言説的意識と実践的意識との区別が示したように、言説が示した内容はすべてを規定しているわけではないゆえに、言説の中で規則の基盤を追究することも適切ではないかもしれない。これと同様に、言説によって提示することができなくてもその規則は根拠のないあるいは先験的なものではないと断言することはできない。

つまり、ダブル・コンティンジェンシーの問題は実践を中心とする構造化理論にとってそれほど重要な問題ではない。すでに解決されたと考えられる。

構造化理論の主体論の全体から考えれば、基本的に「反復されている実践」を中心として展開されていると言えよう。実践が反復されているからこそ、行為が流れとなり、主体が実践的意識に基づいて慣習を形成し、存在論的安全が確保される。

ところで、ギデنزの主体論の中で、時に哲学へのアプローチあるいは心理学へのアプローチがあるが、その議論の核心は常に社会学的な問題意識と繋がっている、その意味では、ギデنزの哲学、心理学は社会学化した哲学、社会学化した心理学とも言えるが、ギデنزによれば、社会理論は社会学の理論ではなく、社会科学の理論なのである、という意味で、構造化理論は学科融合の試みでもあるのである。

### 第3節 構造化理論における制度分析

既に議論したように、ギデنزとは実践あるいは反復されている実践という概念を中心として、構造論と主体論を展開した。こういった展開はパーソンズ流と理解社会学の伝統を一部引き継いだものの、根本的なところから理論図式を再構築した。この立場を取ったギデنزとはもはや機能主義のような制度やシステム分析を受け入れることが不可能であろう。したがって、ギデنزとは制度分析の可能性を相互行為の三つの側面を基盤として開いた。

ギデنزが提示した相互行為の三つの側面というのは、いわば「解釈図式が媒介となり、相互行為にコミュニケーション、構造に有意味化が設定される側面、資源が媒介となり、相互行為にパワー、構造に支配化が設定される側面、規範が媒介となり、相互行為にモラリティ（社会の構成の中でサンクションに修正された）、構造に正当化が設定される側面である。」（宮本孝二,1998:33）図式で表せば以下のようなものである：

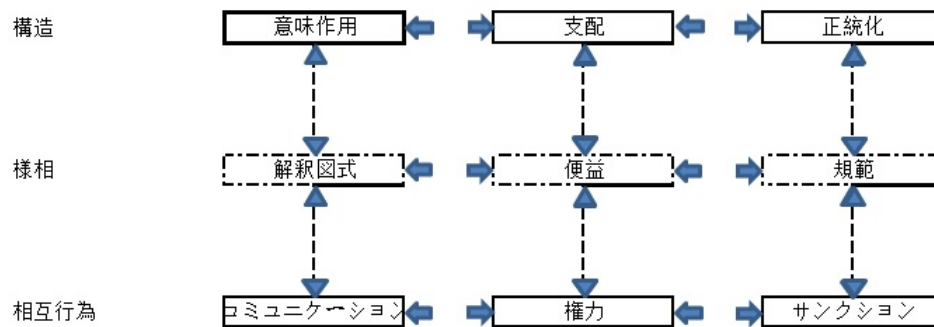


図3 (Giddens,1984=2015:57)

この三つの側面について、コミュニケーションは理解社会学の伝統を引き継いだものであり、サンクションはパーソンズ流の社会学の伝統を引き継いだものであり、権力はギデنز自身が提示した概念であるが、主体性や実践と関わっているという意味で、マルクスの実践の伝統を引き継いだものとして理解することができる。つまり、コミュニケーション、権力、サンクションという三つの側面はだいたいヴェーバー、マルクス、デュルケムそれぞれの流れと対応しているのである。ヴェーバー、マルクス、デュルケムこの三人もギデنزの「資本主義と近代社会理論」の中で扱われた「社会学の創始者である三人」だった。

また、コミュニケーションとサンクションはだいたいギデنزの構造概念の中の規則の二つの側面、すなわち記号化のコードと規範的要素と対応している。だが、実践的意識という概念自身が示したように、規則の二つの側面は言語表現として扱うことができるが、記号化のコードと規範的要素それ自身は言語表現のレベルに限定されるわけではない。それと同様、相互行為におけるこの三つの側面も言語表現だけで理解されるべきではないのである。

宮本孝二によって明らかになったように、この三つの側面の中で構造化理論にとって一番核心的なのは権力という側面である。（宮本孝二,1998）この点について本論文は全面的に議論するつもりはないが、一つだけ強調しておきたい：権力という概念自身も理解社会学とパーソンズ流の社会学を批判する力を持っているのである。なぜなら、理解社会学の諸潮流はあまりにも「意

味」という概念にとらわれ、人間の行為は現実を変化させていること、社会は人間の手によって変遷することなどが見えなくなる、つまり、現実性が欠けているのである。パーソンズ流の社会学はデュルケームの影響を受け、道徳や規範を社会へ帰結し、欲望や逸脱を人間自身へ帰結する、共通的な価値基準があまり強調される結果、人間は実践の中で能動的に社会を変化させるという点が見えなくなるのである、つまり、能動性が欠けているのである。その意味で、実践という概念と実践と直接的に関係する相互行為における権力という概念は、理解社会学とパーソンズ流の社会学によって捻じ曲げられている相互行為を根本的なところから見直そうということと呼び掛けているのである。マルクスがフォイエルバッハに関するテーゼの第三のテーゼの中で指摘したように、人間は現実を変革する、人間は自分自身が生活している環境を作り出していくのであって、人間と環境との関係は二元論的な関係ではない。構造化理論において、現実を変革する能力であった権力は、その意味で資源の動員と繋がる。つまり、権威的資源（人間）と配分的資源（物資）を動員し、目標を達成させる能力というのが、権力である。

コミュニケーション、権力、サンクション、こういった三つの側面はヴェーバーが社会的行為に対して類型化したようなものではなく、すべての行為はこういった三つの側面を内包しているということである。つまり、具体的な行為についてこういった三つの側面から分析するということは、構造化理論の応用としては可能である。そして、社会的地位や財産などによって行為者が動員できる資源もかなり差があるということも、このような研究によって明らかになると予測できる。構造化理論は一般化されすぎて不平等の現象に対してよく対応できないという批判があったが、こういった研究の可能性を考えれば、このような批判は適切ではないと言えよう。

解釈図式と規範は、規則の二つの様相であり、日常生活の中では常に融合しているものである。「日常英語で用いられている「説明責任」概念は解釈図式と規範との交差に対して説得力のある表現を与えている。行為に対して説明責任があるということは、行為の理由の明示し、かつ行為を「正当化」する規範的根拠を提示する、ということである。」(Giddens,1984=2015:58)（解釈図式は明らかに前章で議論した実践によって出来上がった相互理解——すなわち相互知識——との関連している。）様相の中の「便益（英語では facility）」について、ギデنز自身は説明していないが、facility は facilitate の名詞化であることから、語彙的に「施設」や「(権力の実行を)容易にするもの」として理解することが適切だと考えられる。facility は必ず物質的なものではないゆえに、権威的資源と配分的資源と対応し、非物質的に権力の実行を容易にするものと物質的に権力の実行を容易するものこの二つを意味すると考えられる（その意味で抽象的な「施設」として理解する

こともありうる)。

本節の冒頭で既に述べたように、ギデنزは社会を実体として扱うことに対して反対の立場をとっている、それゆえに、機能主義のような制度分析やシステム分析は拒絶しなければならない。したがって、制度分析やシステム分析を可能にするために、意味作用、支配、正統化という社会的システムの構造の三つの次元を提示した。こういった設定は一見した限りでは不思議なものでもあるかもしれないが、その妥当性を理解するのにギデنزの制度概念を前提として考えなければならない。ギデنزによれば、「…前略…社会的全体性の内部で時間一空間的にもっとも広範囲に拡張する慣習は、制度と呼ぶことができよう。」(Giddens,1984=2015:44)つまり、ギデنزにとって制度というのは時間一空間的にもっとも広範囲に拡張する慣習なのである。したがって、制度と相互行為との関係は濃密な関係で現実的には分離不可能な状況なのである。とはいえ、学問のための妥協でもあるが、「判断停止の持続 (epoché)」という戦略を使えば、こういった分離不可能な状況を分析上可能にすることができる。この点について、関口が書き直した図と対照して説明する。

相互行為		様相		構造
コミュニケーション	←	構成的規則 (解釈図式)	→	意味作用 (意味規則の体系)
サンクション	←	規制規則 (規範)	→	正統化 (規範の体系)
権力	←	資源 (物的+精神的)	→	支配 (資源配分の体系)

図 4 (関口,2002)

構造化理論の全体的な図式からいえば関口俊之の理解は基本的には間違っていないが、epochéについての言及がなされていない。

ギデنزは、以下のように述べる。

「私が構造化の「様相」とよぶものによって、相互行為が構成されている際の構造の二重性の中心的次元が示されている。構造化の様相は行為者が相互行

為を発生させる際に依拠するものである。ただし同時に、相互行為システムの構造的構成要素を再生産する媒体でもある。制度分析を括弧に入れる時には、様相は行為者が相互行為を構成する際に用いられる知識、資源のストックとして扱われる。相互行為の構成は、行為の合理化という限定された条件の中でたくみにしかも賢明に行われる。他方、戦略的行為について判断停止したときには、様相は社会的相互行為システムの制度的特徴として考えられる規則と資源を示している。様相のレベルによって戦略的行為と制度は接合され、これによって戦略的行為の分析や制度分析を括弧に入れることの問題は両者の関連を認める方向へと解決される」(Giddens,1979=1989:87)

そして、epochéの方法論的な含意について、ギデنز氏は以下のように述べる。

「社会的システムの構造特性へと分析を限定することが妥当な手順となるのは、それが反省的にモニタリングされた社会行動に対するエポヘー——判断停止の持続——とみなされる限りのことであると強調しておくべきであろう。そのようなエポケーの下でこそ、われわれは社会的システムの三つの構造的次元を、意味作用、支配、正統化として区別することができる。」(Giddens,1984=2015:58)

つまり、解釈図式、便益、規範といった用語は様相を相互行為と構造と区別し、一つの次元として保つために使ったのである。epochéなしにはこういった図式さえ成り立たないのである。はっきりいえば、構造の意味作用、支配、正統化といった三次元は明らかに相互行為のコミュニケーション、権力、サンクションといった三つの側面からの発想であるものの、それはあくまでもギデنزの思惟の経路であり、図式自身の含意ではない。なんといってもギデنزにとって行為と構造は互いに影響を与える関係であるのである。したがって、ギデنزのこういった設定は単に実体観念に対する反発ではなく論理的で妥当だと考えられる。

そして、以下の二つの図式で示したように、意味作用、支配、正統化この三つの次元を巡って、構造化理論において制度に対する分析は可能になった：

(諸)構造	理論的領域	制度的秩序
意味作用	コードの理論	象徴秩序/言説の様式
支配	資源認証の理論	政治制度
	資源配分の理論	経済制度
正統化	規範的規制の理論	法制度

図 5 (Giddens,1984=2015:59)

S-D-L	象徴秩序/言説の様式
D(auth)-S-L	政治制度
D(alloc)-S-L	経済制度
L-D-S	法制度
S=意味作用 D=支配 L=正当化	

図 6 (Giddens,1984=2015:61)

ギデنزによれば、『『実体論的』な発想では、こうしたさまざまな秩序が具体的な制度に分化することが前提とされている。つまり、例えば「政治」なら国家装置の紛れもない形式をもつ社会にも存在する、というわけだ。だが、人類学者の業績が効果的に示しているように、「政治的」——つまり、権威の関係の秩序化に関わる——現象は全ての社会に存在しているのである。それ以外の制度的秩序についても同様のことが言える。」(Giddens,1984=2015:61)実体論に対する批判はともかくとして、ギデنزにとって社会理論は社会学の理論ではなく、社会科学の理論である、つまり、構造化理論は最初から現代社会に限らず、人類学の研究に対しても開放的で、より一般的な理論を目指している。その意味で、制度を意味作用、支配、正統化といった三つの次元からとらえる構造化理論は、ある程度その目標を達成したと言えよう。

#### 第 4 節 構造化理論における社会的システム

これまで何度も「社会的システム」という言葉が出てきたが、言うまでもないが、システム実体論を固く拒絶する立場であったギデنزの場合、機能主義者のシステム概念を援用するわけがない。そして、構造化理論において統合という概念も機能主義者とはかなり異なる形で定義されている。

ギデنزによれば、社会理論にとって一番基礎的な問題は秩序問題であるというパーソンズの判断は間違っていないが、秩序を崩壊(disintegration)の反対として扱うのがパーソンズの間違えたところである。この点について、ギデنزの相互行為論から説明できる。ギデنزが相互行為論の中で示したように、人と人との社会的関係は時間一空間の中で安定化し、社会的システムの再生産へ参与するのである。こういった立場から考えれば、(マルクスの観点では、人間は最初から社会的なものである、それゆえに)主体間の支配や相互コントロールといった社会的関係は人類の歴史より悠久なものかもしれない。つまり、最初から社会的な動物として生きてきた人間は、生まれた時からすでに社会的関係に巻き込まれている。その意味で、社会的関係を切り捨て自分の利益のために「万人の万人に対する闘争」へ赴く人間は存在するわけがない。つまり、「ホブズ問題」はあくまでも「仮」であり、功利主義の前提を受け入れずに現実的に考えればほとんど無意味なものと

言える。さらに、秩序を崩壊の反対として扱う場合、秩序問題は「社会秩序を維持するために何の機能が必要とされているか」という問題へ変換してしまい、社会的目的や機能と繋がられてしまう。ギデنزにとって、秩序問題は「社会の中で秩序を維持するために何の機能が必要とされているか」という問題ではなく、「The problem of order in social theory is how form occurs in social relations, or (put in another fashion) how social systems ‘bind’ time and space.」(Giddens,1981:30)である。つまり、秩序問題は時間—空間と関係する問題である。

構造化理論の中で、時間・空間概念に関する議論は基本的に「実践の在り方」として展開されていると考えられる。実践には時間的な厚さと空間的な幅がある、すなわち、ある実践に対してその実践の特有な時間—空間の特徴がある。簡単にいえば、ある職業に対してその職業の特有的な実践が行われて、それゆえにその行為者は「何時に」「何処で」「何をする」といった問題に対して、時間—空間的な経路が描かれるものである（こういうことは慣習をも意味する）。そして、複数の行為者の場合、その複数の行為者の経路は時間—空間において交差したり離れたりする。交差する場合はその行為者らは「共在」という状態で、離れる場合は「不在」という状態である。こういった行為者らの実践によって時間・空間も内容的に形作られ、場を領域化（regionalization）するのである。社会的システムにおける領域化は基本的に「時間・空間において安定化した反復されている実践の時間—空間的分布」を意味するが、一つ重要なところは、領域化は常に人間の手によって物理的に行われることである。例えば、道路でも喫煙所でも駐車場でもいつも物理的な標記がある、その空間の境界もだいたい周りと区別できる。その意味で、社会的システム全体における領域化、すなわち社会的システムにおける時間・空間において安定化した反復されている実践の時間—空間的分布は、社会的システムに特徴づけているのである。さらに、社会的システムは再生産を通じてシステム性を獲得するのであり、その再生産さえ時間—空間において初めて語られるものになるのである。社会的システムは時間—空間における社会的システムであり、時間—空間において再生産されている社会的システムなのである。その意味で、社会的システムは時間—空間なき且つ主体なき構造とははっきり区別することができる。

ところで、「共在」と「不在」との区別は、だいたい社会統合とシステム統合との区別と対応している。この点について、1979年の「社会理論の最前線」において、社会統合とシステム統合は「行為者間の互酬性（自律/従属の関係）」と「「集団間・集合体間の互酬性（自律/従属の関係）」」(Giddens,1979=1989:83)と定義されたが、1984年の「社会の構成」において「共在のコンテクストにおける行為者間の互酬性」と「複数の行為者や集合

体の間に存在する、拡張された時間—空間を越えた互酬性」(Giddens,1984=2015:56)と訂正された。この点について、ギデنز氏は「CPSTの p.77 で行った「システム統合」概念に関する私の定式化は、曖昧なものであった、社会統合のシステム統合からの分離は、社会関係における共在と不在の区別によって決まるのか、あるいは集合体を取り結ぶ紐帯とは対照的な、行為者を取り結ぶ紐帯どうしの区別によって決まるのかを、私は明らかにしてはいなかった。ここでは、第一の相違を指し示すと考えているが、ともあれ、これら二つの相違は密接に重なり合っている、それゆえ、かつての曖昧さは、さほど重大な欠陥ではなかったのである。」(Giddens,1984=2015:67)と説明したが、なぜ「行為者間の互酬性」と「集団間・集合体間の互酬性」との区別は「共在」と「不在」との区別と「重なり合っている」かについて、議論する必要がある。

社会統合とシステム統合この二つの概念について、最初は David Lockwood(1964)がコンフリクト学派を批判するために提示したものである。Lockwood によれば、パーソンズの社会学に対してコンフリクト学派は「共通的な価値基準」に批判の焦点を絞っており、しかしその点に対していくら批判しても議論しても「社会統合」の次元に止まっており、コンフリクト学派が強調する「社会変遷」さえうまくとらえられていないのである。「社会変遷」をうまくとらえるには、重要なのは行為者レベルのコンフリクトや逸脱などではなく、マルクスが提示した制度的秩序と下部構造との不具合、あるいはそのようなシステムレベルの視角が欠けるべきではないことである。その意味で、コンフリクト学派が批判できたのはあくまでも「規範機能主義」で、「一般機能主義」は社会分析にとってはまだ有効な道具である、と Lockwood は主張する。(Lockwood,1964) つまり、行為者レベルの社会統合とシステムレベルのシステム統合は同じレベルのものではなく、区別しなければならないものである。そして、ギデنز氏が『社会理論の最前線』の中で提示した社会統合とシステム統合この二つの概念は明らかに Lockwood の影響を受けているのである。

また、共在と不在この二つの概念はなぜ社会統合とシステム統合と「重なり合っている」のかについて、ギデنز氏の社会変遷の図式から理解する必要がある。この点について、ギデنز氏は以下のように説明した：

「部族社会つまり小規模な口承文化では、支配的な構造原理が伝統と親族を関係づける軸線にそって作動し、時間と空間に埋め込まれている。こうした社会では社会統合とシステム統合の媒体は同一であり、高度な現前利用可能性をともなった場を舞台装置として相互行為に圧倒的に支えられている。言うまでもなく、この一般的カテゴリーの中にはさまざまな下位類型が

ありうる。ここで強調しておきたいのは、密輸入された進化論的図式としてこうした分類を提示する意図が私には全くない、ということである。口承文化はシステム統合が社会統合から「いまだ」解放されるに至っていない社会として理解されてはならない。レヴィ＝ストロースが他の誰にもまして明瞭に語ってきたことであるが、部族社会——歴史のごくわずかな時期を除いて、人類はこの社会の下で生き抜いてきた——はあらゆる種類の「文明」と実質的に異なっているのである。書字の発明は国家や階級の形成と密接に絡まりあいながら、生きられた経験としての時間の特性を変容する。時間のこうした変容によって書字は時間—空間の遠隔化のさらなる拡大を可能にすることになる。

階級分割社会——いうまでもなく多様な下位類型を含んでいる——の支配的な構造原理は都市的な領域と田園の後背地を関係づける軸線にそって見出される。都市というのは単なる物質的環境にとどまるものではない、都市は行政的資源の「貯蔵容器」であり、農業国家はそれを中心に建国されることになる。都市と田園の文化は社会統合とシステム統合を分離する手段である。とはいえ、この二つの事態は必ずしも同時に発現しはしない。都市と田園の象徴的な関係が様々な形態をとるからである。階級分割社会では、伝統的な慣習や親族関係、場合によっては部族的な自己同定までもが依然として顕著である。国家は場に埋め込まれた慣習の深層にまで浸透していくことができないでいた。そして、圧倒的な軍事力を主な支えとすることによって、政府の官吏は行政による直接的な管理がとりわけ脆弱な辺境の地域までも「包み込む」ことが可能となっていた。とはいえ、階級分割社会の特徴は上で区別しておいた四つの制度的次元が乖離することにある。政治体はその官吏とともに経済活動の手続きからある程度まで切り離され、法と罰則の形式的なコード化が存在し、文字化されたテキストに支えられた象徴的な調整様式が現れる。

近代資本主義はいくつかある「文明」の一類型でもなければ、階級分割社会「からの」進化論的な発展という特色をもつものでもない。真の意味でグローバル化を遂げた、歴史上はじめての社会組織の類型である近代資本主義は、西洋の発展に見られる二度の断絶の中にその起源をもっている。他の名だたる「文明」の形成に比して、西洋の形成にはおよそ 2000 年という長きにわたる分断状態が存在していた。ユーロッパの中央部に帝国という支配的な中心が再確立されることはなかった。しかし、18 世紀から続く政治と産業の革命がかさなり合うことによって、この広範な分断の中にあっても他の社会類型との間に巨大な裂け目が数多くもたらされたのである。近代資本主義がもたらした階級社会に固有の構造原理は、国家と政治制度が相互に関連を持ちつつも脱埋め込みされている点に見出すことができる。技術的進歩

という一般的な傾向に合わせて配分的資源を投下することによって恐ろしいまでの経済力が生み出されてきたのと歩調を合わせて、国家の統治「範囲」にも著しい拡大が見られた。監視——臣民の統治に関わりのある情報のコード化、ならびにあらゆる官吏および管理者による直接的な監視——はシステム統合の社会統合からの切断をさらに推し進める重要なメカニズムとなっている。日々の生活に統治のコード化された手続きが浸透した衝撃を受けて、伝統的な慣習は（勿論完全に消失したわけではないが）分散してしまっている。共在の状況における相互行為に対して舞台装置を提供する場はとてつもない変質をこうむっている。都市と田園に間にかつて存在していた関係は、製造された環境つまり、「建造環境」の不規則な拡張に取って代わられている。」(Giddens,1984=2015:219)

つまり、部族社会の段階は行為者らの実践の互酬性がほとんど「共在」によって成立し、階級分割社会の段階から「不在」の場合が発展されてきたのである。簡単に言えば、ある社会的システムはある程度時間—空間的に拡張すれば、行為者らが必ず互いに見ても顔知らぬ人になる。その時にも、システム性としての互酬性を保持するために（そうでなければ一つの社会的システムではなくなる）、互いに「不在」であっても実践の互酬性を確保するメカニズムが社会的システムに内包されている、ということである。この意味で、「部族社会から階級分割社会へ」、「共在から不在へ」、「行為者間の互酬性から集団間・集合体間の互酬性へ」はだいたい同一の事態で発生されたのである。「二つの相違は密接に重なり合っている」ということは、こういうことだと考えられる。

これまでの議論で示したように、構造化理論において、社会的システム必ず時間—空間における社会的システムである。社会的システムは現に存在するものとして、その再生産は時間、空間、構造などの概念と関連しているのである。システム、構造、構造化この三つの概念について、ギデنز氏は以下のように定義した：（諸）システムは「行為者間あるいは集合体間の再生産された関係で、一定の社会的慣習として組織化される」(Giddens,1984=2015:52)のであり、そして、（諸）構造は「規則と資源、あるいは変換関係の集合であり、社会的システムの特長として組織化される。(Giddens,1984=2015:52)構造化は「諸構造の連続性あるいは変成を、それゆえ社会的システムの再生産を統御する条件」(Giddens,1984=2015:52)である。つまり、社会的システムは「全体性」を持つ、構造はその「全体性」の上で確立されるのである。そして、社会的システムは構造から区別されている：「社会システムは、構造とは対照的に時間—空間の中に存在し、社会的実践によって構成されている。社会システムの概念は、広義には行為の相互依存が再

生産されることを意味する。つまり、「ある構成要素の変化が他の構成要素の変化を引き起こし、逆にこの変化が最初に変化した要素にフィードバックされて最初の要素の変化を引き起こすといった関係」(Giddens,1979=1989:79)を意味している。つまり、構造は時間一空間における反復される実践の中で現れている諸要素であって、記憶の痕跡としては人間によって帰納されて正体が現れるものである、社会的システムは人間に認識されるかどうかに関わらず（意図せざる結果もシステム再生産に貢献しうる）、現に存在するものである。ただし、社会的システムの再生産は構造を通して可能になるというわけで、社会的システムは構造の現実的な基盤とはいえ、実際は相互依存の関係である。

ここでギデنزの「役割理論」に対する立場を確認しておきたい（パーソンズの社会理論の中で、役割理論はマクロとミクロの媒介として、かなり特別かつ重要な理論である）。ギデنزには既存の役割理論に対して基本的に反対する立場である。ギデنزによれば、既存の役割理論に対して反対する立場は三つの点にまとめることができる：「その第一は、役割という概念は、しばしば社会的行為者の「自由演技」を認めはしても、言い換えれば人間の行動は社会によって決定されているという還元論を回避しようとはするが、にもかかわらず、役割理論はたいていの役割の「所与」性にかかなりの力点を置いている、というものである。役割理論によれば、彼また彼女は役割そのものにたいし影響力または支配力を持たない。彼らが影響を与え支配できるのは、役割の「遂行」に対してのみなのである。」(Giddens,1979=1989:127)

「役割概念を社会分析に導入することへの第二の反論は次のようなものである。すなわち、役割という考え方は、その用法において、しばしば（１）その役割形成に付着する複数の規範的期待の間に齟齬がないこと、および、（２）ある役割になにが期待されているかに対し、社会システム内部で合意が存在することを前提にしている、と。」(Giddens,1979=1989:128)「第三のタイプの反対意見は次のようなものである。役割が社会システムの基本的な構成要素であるという把握は、それ自体、社会分析の際に価値や規範を過度に強調するパーソニアンの見方の支柱である。この時、役割は規範を含みこむ概念になっており、社会システムが役割群から成り立っていると主張することは、社会理論においてまず第一に規範が重要だという見解を、あらかじめ肯定することにつながる恐れがある、と」(Giddens,1979=1989:128)つまり、規範を含みこんだ「役割」と人間の「自由」について、パーソンズ流の社会学は前者を第一原理とし、後者を過小評価する傾向があるのである。それゆえに、パーソンズ流の社会学の場合、社会システムは生身の人間によって成立したものというより、むしろ価値秩序によって成立したものである。パーソンズの影響を受けたルーマンも、その価値秩序は理想型でありシステムは

それによって形式的に形成されたものであると強調したわけだが、現実存在する人間また社会に対してやはり分析力が欠けていると考えられる。構造化理論の場合、基本的に人間の「自由」を認めるが、その「自由」は何の制限もなく恣意的なものではないとは主張する。構造化理論にとって、行為者は役割によってすべての行為が規定される行為者ではなく（そもそもすべての行為が役割群によって規定されるわけがない、禁じる行為とすべき行為の間にかなりの自由なスペースがあるのである）、役割に制限されながら役割を規則と資源として利用する行為者なのである、つまり、行為者は常に既存の規則と資源を利用するのである。そして、行為者意識されるかどうかにも関わらず（おおむね意図せざる結果であるが）、行為者や集団の間に相互依存という関係が生じる、こういった相互依存は慣習によって安定化され社会にシステム性を与える、ということである。

こうした社会的システムは、実体論とは異なって、社会を内的統一性をもつものとして扱おうはしない。ギデنزによれば、国家を起源から言えば、ほとんどの国家は「二次的国家」であって、すなわち、国家というのは、単なる社会的システム内部の出来事ではなく、社会的システム外部の諸影響のゆえに成り立つのである。その意味で、構造化理論は従来の社会理論より諸社会的システムの間の関係へ注目しており、国際関係論へもオープンである。そして、こうした社会的システムは、進化論を拒絶し、歴史の断絶へ関心を寄せている、すなわち、社会変遷を自然的な進化過程として扱わず、その構造的接合や矛盾を考察するのである。その意味で、構造化理論は歴史学へアプローチしているのである。こうした社会的システム概念は、完全に機能主義者と異なっていると言えよう。

## 第5節 構造化理論の社会科学原論としての意義

以上のすべての議論を踏まえて、構造化理論の社会学または社会科学の原論としての意義を評価することができる。ギデنزとは正統派の社会学、すなわちデュルケーム・パーソンズによって定式化された社会学を徹底的に批判し、現象学社会学の「知識在庫」に基づいて、社会的世界の存在論的解明を成し遂げた。またそうした「知識在庫」も二重の解釈学の基盤とし、社会科学と自然科学との境界線をはっきりした。二重の解釈学を前提とし、社会科学の批判的性格を明確にした。

また、マルクスの実践概念を導入することによって、社会理論における根深い二元論を存在論の次元で批判し、既存の社会理論を異なる新しい社会観を提示した。その上で、主体論を中心とした構造化理論を構築した。

構造化理論の社会学原論としての位置づけについて、岡田宏太郎が指摘したように、「機能主義理論は、構造化という土台にとっての上部構造であるからに他ならない。」(岡田宏太郎,2000) この点について、構造化理論の機能主義批判から理解する必要がある。すでに言及したように、パーソンズ以降の機能主義の新しい展開に対して、ギデنزとは直接批判していない。はっきり言えば、例えばルーマンのやり方——社会をシステムとしてとらえ、そのシステムを理想型として形式的なものとして把握する——は、ギデنزの立場でそれを直接に批判することができないのである。ギデنزによれば、「いまなおパーソンズに大きく依拠しているものが、機能主義者という自認をやめ、パーソンズの思考がもつ機能主義的傾向を程度はともかく拒絶してしまった。だがそれでもなお、彼らが受け継いでいる他の着想は機能主義のほとんどと結びつきを保っている。例えば彼らは「価値の一致」や象徴秩序に魅了されるあまり、社会活動のいっそう日常的で実践的な位相を等閑視している。また、簡単に境界を設けることのできる統一体であるという点で社会が生物有機体と同じである、と想定する傾向にある。」つまり、ギデنزの機能主義批判は、一番重要なのが、社会を有機体に例えることに科学的な根拠がないという点にある。つまり、ギデنزとは機能主義の認知的プロセスを批判することによって、機能主義の根拠をくずした(勿論これも強い批判になっているが)。機能主義の諸転回に対して、それほど批判の立場はなかったのである。その意味で、ある程度構造化理論を機能主義の土台として理解することができよう。

また、全体的にいえば、構造化理論は既存の社会理論を崩壊させるための理論ではなく、補足させる理論なのである。その補足させたところは、一番重要なところは生身の人間の生き生きする姿を描いた主体の行為論あるいは実践論——ギデنزが批判したように、パーソンズ流の社会学の一つ重大な問題は行為論の欠如——である。こういった行為論/実践論によって、構造化理論は社会学原論さらに社会科学原論としての位置づけが可能だと考えられる。

そして、社会学の研究対象は、基本的に人間の実践であるが、さらにいえば、実践の反復、人々の実践の相互関係、実践によって形作った時間—空間形態、実践の中で再現される構造、主体か構造かどちらかを *epoché* しよう一つを分析することなどが挙げられる。研究手法はこれまでとはほとんど変わらないが、構造化理論に依拠することによって、ミクロな次元において権力や言説的意識や実践的意識などの分析、マクロな次元において制度分析(言説分析、正統化分析など)、これまでの解釈と違って新たな社会像への道が開かれた。このような作業の結果は正統的合意が期待していたような「規律」ではないが、社会との相互作用によって、社会の変革を進ませるこ

とがありうる、つまり、社会学研究は社会学者の実践である。

つまり、ギデنزの構造化理論は、パーソンズ以降の社会理論の中で、かなり独特なものであり、重要な意義を持つに違いない。

### 第3章 構造化理論の問題点と可能性

既に前章までで議論したように、ギデンズの構造化理論は、現代社会学に対して重大な意義がある。勿論、こうした構造化理論もさまざまな批判を受けている。その批判の多くは、構造化理論に対する誤解から生じたのであって、これまでの議論によって解明できるだろうが、構造化理論には重大な欠陥がないわけではないのである。本章はこれまでの議論の延長線上に、構造化理論の一つ重大な問題、すなわち創発性問題について議論し、ギデンズはこの問題を適切に処理していないことを明らかにする。さらに、そのすべてを踏まえて、構造化理論のこれからの発展する方向を展望する。

#### 第1節 構造化理論の問題点：創発性問題について

これまでの議論で明らかにしたように、ギデンズは構造化理論の中でほぼ二元対立問題を解決したのである。しかしながら、若干残っているところがあると云わざるを得ない。そのうちに一番重要なのは創発性問題なのである。これから本章で示そうとしたように、この問題は社会学における創発性の実質、隠されてきた視角転換、epochéの方法としての有効性などの重大な問題と直接に関連しているのである。

創発性という概念について、社会学分野においては、デュルケームの説明が非常によく知られているのであろう。デュルケーム自身は創発性という術語を使ったことないが、社会の実在性について議論する時に社会の創発性を原理的に説明した。デュルケームのこの説明の段落はかなり引用されているもので、ギデンズもこの段落について議論したことがある：

「青銅の硬度は、それを造るために利用されてきた銅、錫、鉛のいずれにも由来しない、というおも、これらは全て柔らかく可鍛可能な物質であるからだ。青銅の硬度はそれらの物質が混合されたことからもたらされている。水の持つ液体性や耐久性などの特性はそれを構成している二つの気体にはなく、混ぜ合わせることによってその二つの気体が創り出す複雑な物質の中にある。この原理を社会学にも応用してみよう。あらゆる社会を構成しているこの独特の統合が、孤立した意識に生起する現象から区別される新しい現象を生起させていると述べるのが許されるとすれば、これらの特殊な事実こそが社会的現象を生産している社会そのものであって、決して一部——つまりは社会の成員——などではないのだ、と認めざるを得なくなるだろう。それゆえ、この意味において、この事実は個人の意識そのものの外部に存在するのであって、生命の示差的な特徴が生命有機体を構成する化学的物質の外部に存在するのと同じことなのである。

私はこの一節をかなり長々と引用したのは、それが非常によく知られた一節であり、とりわけ説得的な定式として引き合いに出されることがかなり多いからである。たしかに、社会的システムは行為者の意識に言及する概念では記述しえない構造特性をそなえている、しかし、人間行為者が「行為能力を持つ行為者」と認識可能である限り、銅や錫、鉛のような相互に分かれて存在することはない。人間行為者は何もないところから寄り集まって融合もしくは結合し、新しい統一体を形成するのではない。ここでデュルケームは（他者との結合によって汚染されていない）自然状態にある個人の仮説的な概念化を社会的再生産の現実的なプロセスを混同してしまっている。」  
(Giddens, 1984=2015:206)

本論文で既に明らかにしたように、社会学分野において、メタファーの使用は慎重でなければならない。デュルケームの説明はほとんどメタファーで行われ、社会の実在性を実質的に説明でしなかった。ギデنزもメタファーの問題をよく認識できている、それゆえ、この段落に対して反論を出したわけだが、それほど重要視しなかったのである。ギデنزが示したように、「人間行為者が「行為能力を持つ行為者」と認識可能である限り、銅や錫、鉛のような相互に分かれて存在することはない。」という理由だけで、すでに反論になっているのである。また、創発性を強調する者はほとんど社会実在論者に限られているという現状も、ギデنزが創発性問題を問い詰めなかった原因だと考えられる。

しかし、創発性のメタファー的な由来をとにかくとして、そのもっとも純粋な意味で、すなわち、社会（あるいは構造）は諸個人へ還元できない、この命題は真であるか、偽であるか、さらに、この命題はいったい何を意味するのか、改めて考察しなければならないのである。

## 1、構造化理論における構造の間主体性

すでに言及したように、構造化理論において、構造は社会的再生産に再帰的に関わる規則と資源だとみなされている。規則には二つの様相、すなわち規範的要素 (normative elements) と記号化のコード (codes of signification) があり、資源には二つの種類、すなわち権威的資源と配分的資源がある。また、規範的要素は相互行為におけるサンクション、記号化のコードは相互行為におけるコミュニケーション、権威的資源と配分的資源は相互行為における権力、と対応している。そして、ギデنزが強調したように、これらは行為者にとって外部のものではなく、内部のものなのである。「構造は、社会的慣習のなかに具現化した場合のみ、知識をもった行為者のふる

まいを方向づける記憶の痕跡として、時間一空間に現前するということがある。」(Giddens,1984=2015:44)、つまり、構造は、一つの社会的システムにおけるすべての行為者の記憶の痕跡の総合の中に存在するのである。

したがって、一つの社会的システムにおけるすべての行為者の記憶の痕跡の総合の中に存在する構造は、絶対に特定の行為者へ還元することができないのである。なぜなら、構造概念の全体性は一つの原因であるが、もう一つの原因は、特定の行為者の記憶の痕跡は、必ずしも再びに他の行為者に通じるわけではないからである。特定の行為者の記憶の痕跡に依拠するものは、決して相互行為へ通用する構造にはならないのである。

この点について、ヴィトゲンシュタインの私的言語論はある程度参考になるのである。私的言語 (private language) というのは、「哲学探究」の I 243 節で提示されたある仮説である。具体的に言えば、私的言語とは以下のようなものを指しているのである：「ところで、誰かが自分の内的体験を——自分の感情や気分などを——自分だけのために書きとめたり、喋ったりできるような言語というものを考えられないだろうか？———そういうことなら、私たちの普通の言語でできるのでは？———いや、そうじゃない。私の考えている言語の単語は、喋る人だけにしかわからないことを意味しているものなのだ。その人の、じかの、私的な感覚を指示しているものなのである。他人には理解できない言語なのである。」(Wittgenstein,2013:170)

そして、ヴィトゲンシュタインは私的言語が不可能であることを、以下のように証明した：

258 こういうケースを想像してみよう。ある感覚がくり返し起こるので、私はそのことを日記に着けようと考えた。そこでその感覚 (Empfindung) を記号「E」に結びつけることにして、その感覚を感じた日にはかならずカレンダーに記号「E」を書くこむのである。———まず言っておきたいのだが、その記号の定義をはっきり述べることはできない。———けれども自分に対してだけは、いわば、指さしてする定義のように定義できるのだ！———えっ、どうやって？感覚を指さすことができるわけ？———普通の意味ではできないけどね。でも、口に出して言ったり、記号を書いたりしながら、その感覚に注意を集中させて———いわば心の中でその感覚を指さすわけだな———でもなんのためにそんな儀式を？だってそんなの、儀式にしか見えないじゃないか！定義をすれば、記号の意味が確定できるわけなのに。———ところで、確定は、まさに注意を集中することによって行われる。注意を集中して、記号を感覚の結びつきを胸に刻むわけだから。———「胸に刻む」ということは、そういうプロセスを経てお

けば、将来、正しくその結びつきを思い出せる、ということに過ぎない。しかしこの場合、私には「正しさ」の基準が見当たらないのだ。ここと『正しさ』というのは、私にとっていつも、『正しさ』だと思えるようなもののことだ」と言いたくなるかもしれない。ということは、「ここでは『正しさ』を問題にできない」ということでしかない。(Wittgenstein,2013:176)

260「うん、これ、また感覚Eだと思うが」。——たぶんそうだと思う、と、君が思ってるわけだ！そうすると、この記号をカレンダーに書き込んだ人は、全く何もメモしなかったことになるのでは？——「誰かが記号を、——例えばカレンダーに——書き込めば、何かをメモしたことになる」ということを、当然だと見なさないように。メモには何かの機能があるけれど、「E」には、そのままでは機能がない。(Wittgenstein,2013:177)

261どんな根拠があって私たちは「E」を何かの感覚の記号だと呼ぶのだろうか？なにしろ「感覚」は、私たちに共通の言語、私一人だけが理解しているわけではない言語の、単語なのだ。だから、この単語を使うには、みんなに理解されるような正当化が必要である。——「それが感覚である必要はない」とか「彼が『E』と書くときには、何かを持っている」と言ったとしても、何の役にも立たないだろう。——しかも、それ以上のことは言いようがないかもしれない。しかし、「持っている」や「なにか」もまた、共通の言語に属している。——というわけで、哲学をしていると結局は、分節化されていない音声しか発したくないような地点に辿り着いてしまうのだ。——だがそういう音声が表現であるのは、何らかの言語ゲームにおいてだけである。そういう言語ゲームのことをこれから記述する必要がある。(Wittgenstein,2013:178)

262「単語を私的に説明した人は、その単語はこういうふうに使おうと心の中で決めているに違いない」と言えるかもしれない。だが、その人はどのようにしてそうしようと決めるのか？その人が使い方のテクニックを作り出すのだ、と私は考えるべきなのか？それとも、仕上がっているテクニックが目の前にあったのだ、と考えるべきなのか？(Wittgenstein,2013:178)

263「将来、このことを『痛み』と呼ぼうと、ぼくは（心の中で）決めることができるんだ」。——「でも確かにそういうふうにしたのかい？そのためには、注意を君の感情に集中させるだけで十分だったと、自信あるわけ？」——不思議な質問だ。(Wittgenstein,2013:178)

256では、私の内的経験を述べていて、私にしか理解できないような言語は、どうだろう？どのようにして私は私の感覚を言葉で表すのだろうか？——私たちが普通にやっているように？だとすると、私の感覚語は、

私の自然な感覚表現と結びついているのだろうか？——その場合、私の言語は「私的」ではない。それは他人が私と同じように理解できるかもしれない。——けれども私に、自然な感覚表現がなく、感覚しかないとしたら、どうだろう？私はともかく感覚から名前を連想して結びつけ、記述する時にその名前を使うだけだ。——(Wittgenstein,2013:175)

257 自分の痛みを表すことにしない（うめかない、顔しかめない、など）人たちがいるとしたら、どうだろう？子どもには「歯痛」という単語の使い方を教えることができないだろう。——さて、その子どもが天才で、自分でその感覚の名前を作り出すとしよう。——だが、勿論その単語ではコミュニケーションができないだろう。——ということは、その子どもは名前を理解しているのだが、その意味をだれにも説明できないことになる？——ところで、「自分の痛み」に名前をつけたということは、どういうことなんだろう？——どのようにして痛みに名前をつけたんだろう？！どのようにしたとしても、それにはどのような目的があるのか？——「彼がその感覚に名前をつけた」という時、名前をつけただけで意味が発生するためには、その言語にはすでに多くのことが準備されていなければならない。「誰かが痛みに名前をつける」ということについて語るときには、単語「痛み」の文法がすでに準備されているのだ。その文法によって、新しい単語が文で配置されるポストが指示されるのである。

(Wittgenstein,2013:176)

つまり、感覚体験の私秘性は感覚体験として記述する際に、公共的言語の次元に入ってしまったことになる。また、私的言語は感情とともに、自然的に流れ出すのであれば、知られてしまうことになる。さらに、例えば痛みを命名するとしたら、命名自身は何の意味もない。一番重要なのが、私的感覚を記述しようとしても、「その感覚だ」と判断する基準は内部には存在しないし、外部にも存在しない（外部に存在するなら私的にならないからだ）。内部に存在するのならまた公共的言語の次元に入ってしまうことになる。

こうした私的言語論の証明の中で、われわれは重要なポイントが得られる、すなわち、構造化理論における構造も、言語と同様に、特定の行為者の記憶の痕跡に依拠することができない、ということである。しかし、そうだとすると、われわれは必ずしもその公共の基準パーソンズのように、外部の「価値の一致」へと求めるわけではない。ギデنزが強調したように、「社会的システムが主として「社会という客観」の視点から把握される時、規範によって調整された正統的秩序の全面的影響が、社会行動の完全なる決定因すなわち「プログラマー」として強調されるようになる。こうした視点が覆い隠しているのは、社会的システムの規範的要素が偶有的

な要求であるという事実である。そうした要求は現実の出会いのコンテキストにおけるサンクションの効果的な動員を通して維持され、「重視」されなければならないからである。規範的サンクションは支配の構造的非対称性を表現しており、名目上であれ規範的サンクションに従っている人々の間に成り立つ関係は、当の規範が生み出していると想定されるコミットメントの表現にとどまらない多様な種類の関係がありうるのである。」(Giddens,1984=2015:58)つまり、外部に存在する「基準」は、実践の中で行為者らの相互確認、相互承認の中で成立するもの、ということ他ならない。つまり、構造はある種の「合意」なのであるが、この合意は絶対的な一致、あるいは普遍的に認められるものを意味するわけではない、ただ実践の中で「これでやって行きましょう」という形で存在している。この種の合意が存在しなければ、行為者らの実践も進まないであろう。

二つ現実の例から見てみたい。

(1) 留学生向けの日本語学校の最初の授業では、ほとんどの場合「命名式」が行われている。なぜなら、留学生らは自分の名前を日本語に翻訳することができなく、また先生は名前でクラスを管理しなければならないからである。しかし、欧米の留学生らの名前は長すぎて短縮させなければならない場合や、二人とも同じ名前でそれを区別つけさせたりする場合、さらに、その名前の発音が日本語に転換できず適当に発音を変化させたりする場合もたまにある。こうした状況に対して、基本的に先生の指定が基準となる。本当の発音とは多少違っていても、一般的に本人が反対しないかぎり全クラスの「合意」として受け入れられるのである。そして、日本にいる間に、日本語学校から出ても、その名前はそのまま使い続けられる場合が多い。

(2) ある留学生が店で鍋を注文した。店の人間がお客さんが外国人であることを気づき、生卵を出す前に「生卵でいいですか、ほかの何かに変えてもいいよ」と聞き、留学生が「はい、いいよ」と答えてから、生卵を出した。

例(1)は、「名前」に対する合意がいかんして達成されたかを説明している。例(2)は、日常生活の中に、そもそも絶対的な「合意」や「決まり」が存在しない、存在しているのが、ただその場で行為者らの相互行為の中で、相互確認、相互承認を通して成立する、「これでやって行きましょう」という一時的な合意なのである(場合によって合意の時効性も変わるが、また書き言葉は喋り言葉より変わりにくい)、ということを説明している。(ところで、ギデنزの構造化理論の中で、主体の自由を強調したが、

具体的な事例が一つもなかった。それゆえ、ギデنزが良く強調した「ルーティン」や「慣習」などの概念に対して「不変なもの」と読み取る傾向もみられるのである。この二つの事例はルーティンや慣習などが「不変なもの」ではなく、「ある程度安定しているもの」であることを説明することができる。また、このした相互行為の原理は、ギデنزがいう権力者は一般人を支配しているに見えても、必ず相互的に影響を与えているという「コントロールの弁証法」とも一致している。）

つまり、構造は特定の行為者の記憶の痕跡ではなく、単なる諸個人の記憶の痕跡の集まりでもなく、実践の中で達成される個々の合意その全てを全部含んでいるものに他ならない。つまり、構造化理論における構造概念は間主体的な概念に違いない。（規則を中心として議論してきたわけだが、規則だけではなく、資源も通じるかどうかの問題がある。配分的資源でも使い方が必ずしも通じるわけではない。）

### 構造化理論における構造の創発性

前節で議論したように、構造化理論における構造概念は間主体的な概念である。しかしそれだけでは構造が創発性を持つという結論を下せない。普段は、「間主体的なものは特定の主体へ還元できない、したがって、そして創発性をもつ」と考える傾向があるのであろう。しかし、もし構造概念の範囲を厳密に「達成できた合意」だけに絞れば、合意が達成した時点で諸個人の脳の変化へ還元できるかもしれない。その意味で、間主体的な概念だからといって、必ずしも創発性をもつわけではないのであろう。結論から言えば、構造化理論における構造は確実に創発性をもつのである。しかし、それは間主体的な概念だからではなく、これから示そうとしているように、それはギデنزが構造に対して過剰に期待してしまった結果なのである。

この問題について、「構造」という術語の意味を徹底的に反省する必要がある。ギデنزによれば、「構造化理論において「構造」は、社会的再生産に再帰的に関わる諸規則と諸資源だと見なされている。社会的システムが制度化されている時、社会的システムは、時間と空間を越えて関係が安定化されるという意味における構造特性をもつ。」(Giddens,1984=2015:20)、また、「社会分析において構造とは、社会的システムに時間一空間を「接合する」ことを可能にする構造化特性、すなわち、類似性をもつと認められる社会的慣習が多様な時間と空間の範囲を越えて存在することを可能にし、それに「全体的」な形式を与える特性、ということになる。構造が変換関係の「ヴァーチャルな秩序」であるというのは、次の二つのことを意味し

ている。すなわち、再生産された社会的慣習としての社会システムが「諸構造」をもつのではなく「構造特性」を示すということ、そして、構造は、社会的慣習のなかに具現化した場合のみ、知識をもった行為者のふるまいを方向づける記憶の痕跡として、時間—空間に現前するということである。」(Giddens,1984=2015:44)、「私の言う構造は、少なくとももつとも原理的な意味において、後者のような規則（と資源）である。だが、「変換の規則」と言ってしまうと誤解を招きかねない、というのも、すべての規則が本質的に変換可能性をもっているからである。」(Giddens,1984=2015:44)つまり、構造は時間——空間を乗り越えるものである——明らかにギデنزはその期待している。したがって、ギデنزの構造化理論において、そもそも構造は「現時点において、諸個人の記憶の痕跡の総合」に止まらず、未来においても構造は相互行為の中で必ず通じるものだと想定されているのである。すなわち、構造概念は単なる物質的あるいは記号的なものではなく、あるいは記憶の痕跡のような心理的なものでもなく、そのすべてより、さらに「未来における通用性に対する保証」、すなわち「これから達成する合意」も暗に内包されているものなのである。その意味で、構造は諸主体へ還元することができないのである、すなわち、創発性を持つのである。

しかし、こうした創発性はデュルケムまたその後の社会実在論者が強調してきた創発性とは違って、構造は諸個人へ還元することができない——それは構造化理論における構造が実体性を持つからではなく、逆に構造化理論における構造概念がそもそも不純粋なもので、そこから生じた意外な結果なのである。

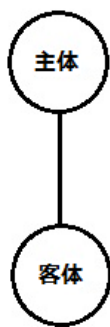
ところで、間主体的な概念に対して、過剰に期待してしまったのは、決してギデنزだけではなく、実はこうした「未来における通用性に対する保証」が、間主体的な概念の中によく見られるものでもある。言語は非常に典型的なものである。これまでの哲学者や言語学者は、言語を「これから達成する合意」とみなすことはほとんどなく、未来においても通じるものだと見なしているのが一般的なのである。かれらはこれまで通じてきたからこれからも通じるのだという錯覚にとられ（すでに議論したように、通じてきたというのが、ほとんどこれまでの実践の中での相互確認、相互承認と関係している、こうした相互確認、相互承認によって達成した合意は、時効性を持っているのである。すぐ時効になるわけではないという意味で、ある程度未来へ延ばされる）、すでに達成した合意しか観察できない、すなわち、もつとも純粋な間主体的な概念は未来について何も保証していないという事実を無視し、間主体的観念をそれ以上に期待してしまい、「未来においても通じる」というイメージを間主体的な概念に押し入れたのである。

これで、Epochéの有効性を懐疑しなければならない。たしかに、構造化

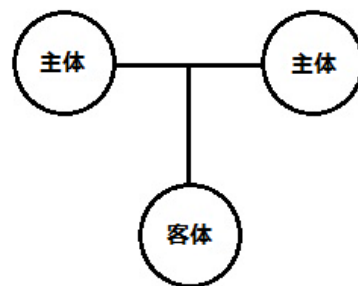
理論において、主体と客体を実践の中に形成され、再形成されるものとして、どちらを epoché しなければ社会分析ができなくなると言う意味で、epoché が有効性を持つのであろう。しかしながら、すでに議論したように、そもそも構造という概念は「未来における通用性に対する保証」を内包している概念である。それゆえ、主体を epoché していても未来における通用する構造を分析することが可能なのか、という問題が生じる。勿論、構造化理論における構造概念は極めて抽象的な概念であるゆえに、未来においても、構造が転換されても「構造」というカテゴリーへ帰属することができる——理論の解釈としてはこの解釈は論理的に正しいかもしれない。しかし、構造分析は全てそのような非常に抽象的な次元に保たれるならば、生産性や現実に対する批判力が必ず落ちてしまうのである。つまり、epoché だけでは、「未来における通用性に対する保証」が内包している構造概念をそのまま分析することが非常に困難である。

### 隠されている視角転換

これで二元対立問題の源泉の一つであった視角の問題を議論することができる。勿論、すでに言及したように、二元対立を調和するのに、新しい社会の存在論を提出しなければならない。ギデنزがマルクスから引き受けた実践概念によって、主体と客体との関係について新たな社会的存在論を構築した、そして、本論文で主張したように、それでギデنزが二元対立問題をほぼ解決できたと言える。しかしながら、若干問題が残留していると言わざるを得ない。例えば、ギデنزがいった主体と客体との関係は、個人としての主体か、集団としての主体たちか、どちらからははっきり区別していない。



(1)

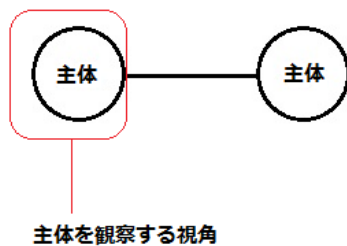


(2)

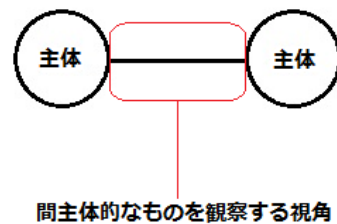
ギデنزの構造論の立場に従えば、すでに議論したように、間主体的

な概念としての構造は必ず（２）のモデルに依拠しているに他ならない。しかしギデンズの主体論は、ほとんど現象学社会学の引き続きであって、間主体性はほとんどない、つまり、（１）のモデルに依拠していると考えざるを得ない。つまり、構造化理論の中の主体と客体との関係が、（１）なのか（２）なのか、区別できなくなるのである。

こうした問題は存在論的な問題でありながら、方法論、認識論的な問題でもある。そもそもなぜこうした問題が生じたかについて、「社会名目論」と「社会实在論」との対立、「方法論の個人主義」と「方法論の集団主義」との対立へ遡ることができる。例えば、方法論の集団主義に従えば、全体性を視野に収まることになる、すなわち（２）のモデルに近い立場になるのである（構造は間主体的なものであることを明らかにしていなかったにもかかわらず）。方法論の個人主義に従えば、間主体的な次元も同時に見えなくなる、すなわち、（１）になるのである。つまり、（１）と（２）の区別はそもそも視角の区別として現れたのである。この視角の区別は以下の図で説明することができる。



（３）



（４）

つまり、（３）の視角で社会を（１）のモデルに見える。（４）の視角で社会を（２）のモデルに見える、ということである。社会实在論の立場は「集団となる主体ら」を視野に入れているゆえに、（４）に近い視角であったのである（はっきり言えば、少なくとも初期の社会实在論は（４）のように間主体の次元を明白に提示していない、ただ（４）より広い視野を採用することで、（４）を内在的に包含することになったのである）。

つまり、社会名目論と社会实在論との区別は、そもそも視角にあったのである。こうした視角問題は、二元対立の深刻な原因の一つでもある。この意味で、存在論と方法論との関係もかなり複雑で相互的に影響を与えている関係として理解しなければならない。

そして、社会实在論的な視角は、間主体的な視角を包含しているため、その視角から観察し得られた諸概念もほとんど間主体性を持っているの

である（すでに証明したように、構造は間主体的なものである、したがって、客体も間主体的なものとして扱うべきである。それは全ての客体が間主体性をもつということを意味しない、ただ社会中に通用される物事はほとんど間主体性をもつということを意味するのである）。ギデンズの構造概念はその典型的な例である。すなわち、ギデンズは正統派の社会学を徹底的に批判しようとしたものの、彼の構造概念は明らかに客観主義的社会学の影響を受けているのである。そして、間主体性をもつ構造概念と現象学社会学の主体概念との間に、視角転換が生じた、ということだと考えられる。つまり、ギデンズは構造化理論の中で、（１）と（２）の分裂、（３）と（４）の分裂、そのまま受容してしまったのである。

## 第２節 構造化理論の可能性：構造化理論の彫琢に向けて

以上の議論で、構造化理論の二つの問題、すなわち構造概念の創発性の実質と隠された視角転換を明らかにした。しかし、これらの問題は構造化理論の社会学または社会科学の原論としての重要な意義を損なったわけではない、ただし、より精緻化することが要請されているのである。本節で、この二つの問題に対して、解決しうる道を手短に議論してみる。

既に言及したように、こうした問題の焦点は、未来における通用可能性、または視角転換にある。視角転換の問題について、（１）と（２）が示しているような存在論次元の問題と（３）と（４）が示しているような観察視角の問題の二つがある。

存在論次元の問題については、すでに議論したように、ギデンズは正統派の社会学の影響を受けており、「全体を見る」という視角で構造化理論の構造論を展開してきた。その「全体を見る」という視角は間主体的なものを見る視角より広い視角で、すべてを未整理のまま視野へ収まることになった。それゆえ、構造化理論の構造論は「集団として実践してきた主体らと客体との関係」についての議論であるものの、あまりにも混雑であるゆえに、間主体的な視角を導入し、より精緻化するという作業が要請されている。つまり、構造化理論の中で間主体的な理論が欠如している、ということに他ならない。この問題の解決する方法も簡単で、間主体的な理論を導入すれば解決できると考えられる（細かいところは後で議論する）。

また、観察視角の問題について、この問題はやはり存在論次元の問題ではなく、社会分析の次元の問題なのである。つまり、本論文は、視角問題を社会分析の次元にとどめるべきであり、方法として二つの視角とも

正当であると主張する。なぜなら、例えばこれまで議論してきた「合意」はあくまでも複数の行為者の実践上の前提あるいは条件として単独の行為者へ還元できない。その意味で、その「合意」は超越的なものでもないし、神秘的なものでもない、実体性を持たないものに違いない。つまり、方法の問題として取り上げるべきである。さらに言えば、社会的世界において、ほとんどの客体が共同実践によって認識されてきて、つまり、ほとんどの客体の内容は共同実践によって充実されるのである。（ここでは物質的世界の存在を否定するわけではなく、ただ人類学者が示したように、食べられるものでも、文化によって、食べられないものとして認識されたり、食べてはいけないものとして規定されたりすることがある。つまり、物質的世界はどのように扱うのかは反復されてきた実践によって形作られた社会・文化の形態によるのである、その意味で、客体の内容が最初に物質的世界に与えられるのではなく、反復されてきた実践と関わっているのである。）その意味で、ほとんどの客体は間主体性を持っているに違いない。つまり、間主体的なものを観察する視角は社会学にとってとても重要であり、不可欠なものであろう。本論文は二つの視角とも正当性があると主張するのが、そのためである。そして、そうすることによって、構造化理論における構造、社会統合、システム統合、コンフリクト、矛盾などの概念もより固い基盤を獲得できる。

構造化理論における構造概念の創発性問題について、すでに言及したように、未来における通用可能性が問題の焦点である。構造概念が、未来においても通用するだろうと期待されているゆえに、負担が重過ぎる。本論文は構造概念に、時効性の概念を導入する必要があると主張する。時効性の概念を導入することによって、構造概念がより純粋的な概念になり、科学性もより高まる。

そもそもギデنزの構造化理論において、構造概念が論理的に時効性の概念を包含している。ギデنزによれば、「社会分析において構造とは、社会的システムに時間－空間を「接合する」ことを可能にする構造化特性、すなわち、類似性をもつと認められる社会的慣習が多様な時間と空間の範囲を越えて存在することを可能にし、それに「全体的」な形式を与える特性、ということになる。」(Giddens,1984=2015:44)、つまり、そもそもこうした定義に厳密的に従えば、構造は実践から抽出される構造化特性なのである。この抽出の作業は、ギデنز一人の作業ではなく、すべての社会分析者に開放されているのである。規則と資源はギデنزが実践における構造化の諸要素を抽出し帰納した結果なのである。はっきり言えば、こうした構造概念の内容はそもそも空虚であり、その内容の充実は社会分析者の観察、分析、帰納に依拠するのである。しかし周知

のように、帰納法は  $n+1$  に通用しない。すなわち、いくら現実の例があったと言っても、帰納法によって得られた結論は必ず未来に通用するわけではない。厳密に経験に依拠するのであれば、必ずこういう結果になる。「これから通用するんだろう」という期待は、これまで達成した合意は現時点において時効になっていないという状況に対する幻想にすぎない。

しかし、ギデنزが再三強調したように、構造は時間——空間、さらに主体を超越するものであり、その意味で社会的システムと区別することができる。すなわち、もし時効性をそのまま導入すると、構造は社会的システムへ降格してしまうことになる。この点は本論文の時効性の主張と正反対である。つまり、そもそもギデنزの構造概念は時効性を論理的に包含しているにもかかわらず、ギデنزはやはり超越的な全体性を追求しているのであろう。

この問題について、実際はそれほど難しい問題ではなくて、構造概念の用法を簡単に考察すれば明らかになる。ギデنزが構造概念を使う際に、社会の「特徴」あるいは「性格」をつかもうとしているからである。

- (1) 構造原理：社会的全体性を組織化する原理
- (2) 諸構造：社会的システムの制度的分節化に関わる規則—資源群
- (3) 構造特性：時間と空間を越えて伸張していく、社会的システムの制度化された特徴

構造原理を同定し、間社会的システムにおいて複数の構造原理がどのように接合しているかを同定する作業は、制度分析のもっとも包括的な水準を表している。言い換えれば、構造原理の分析は時間—空間も「最も深い」層を越えて制度が分化し分節化していく諸様式を対象とする。構造群つまり諸構造の研究は、構造原理を示す際に伴う変換/媒介関係の「クラスター化」を抽出することに関わる。構造群は社会的再生産に組み入れられる規則と資源が持つ相互改変性によって形成される。(Giddens,1984=2015:222)

具体的な例から言えば、ギデنزによれば、近代資本主義に関するマルクスの分析を構造群で表せば、以下のようなものになる：私的所有：貨幣：資本：労働契約：利潤(Giddens,1984=2015:222)。

つまり、社会変遷さえ現実存在すれば、構造群は変化するのである。構造は決して完全に時間—空間を越えるものではなく、ある程度安定性

をもつものにすぎない。ギデنزが主張する構造原理——構造群（諸構造）——構造化の要素は、ギデنزの言うように抽象度の差異というより（ギデنزによれば、構造原理が一番抽象度の高いもので、構造原理——構造群（諸構造）——構造化の要素は高低差順で並んでいる）、安定性あるいは時効性の差異として理解したほうが適切である。つまり、時効性を導入することは、構造を社会的システムへ降格させたわけではなく、概念を洗練させ、純化させたのである。構造概念のこれまでの用法とも一致しているのである。

以上から、本論文を通して、構造化理論は創発性問題を克服でき、より細緻な理論になるだろうといえよう。そして、構造化理論に基づいている具体的研究も科学性、現実性が高まることになると考えられる。

## おわりに

ギデنزらは正統派の社会学を批判し、社会科学の研究対象である社会的世界は、実践によって出来上がった相互理解によって保証されていると主張し、こうした実践によって出来上がった相互理解は行為者らのみならず、社会学者らにも利用されるという点から、「予言の自己成就」や「自己否定」が正統派の社会学が言うように、偶然なこと、あるいは問題視すべきことではなく、それこそ二重の解釈学であり、社会学または社会科学の基礎原理なのである、と提示した。

また、ギデنزらは認知言語学者ライコフと近い立場から、機能主義者の脳の中に働いている認知的プロセスには正当性が欠けていると主張し、機能主義者の基本的な立場をなくさせた。

構造化理論の中で、ギデنزらはデュルケームの実証主義伝統とヴェーバーの人文主義伝統を拒否しつつ、マルクスの批判主義伝統を受け入れることにした。マルクスの実践概念を中心とした社会観に基づいて構造化理論を構築した。こうした構造化理論はより厳密な思惟の経路に基づき、人文・社会諸分野の経験研究を積極的に取り込んでおり、より科学的な理論なのである。

しかしながら、ギデنزがマルクスの実践概念を継承したわけだが、そうした実践は個人の実践なのか、集団の実践なのか、それについて徹底的な分析が行われず、それゆえ、間主体的な理論の欠如や、構造概念の不純粋や、主体論と構造論との間の視角転換などの問題が生じた。

こうした問題に対して、本論文は間主体的な理論の導入、構造概念の時効性の導入を解決方法として提出し、そうしたことによって、構造化理論がより細緻的、科学的な理論になると主張する。

## 参考文献

- Giddens, Anthony,1971, *Capitalism and Modern Social Theory: An Analysis of the Writings of Marx, Durkheim and Max Weber*, Cambridge:University Press.
- Giddens, Anthony,1979, *Central Problems in Social Theory: Action, Structure, and Contradiction in Social Analysis*, London:Macmillan/Berkeley:University of California Press. (=1989, 今田・友枝・森訳『社会理論の最前線』ハーベスト社.)
- Giddens, Anthony,1981, *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, vol. 1: *Power, Property and the State*, London:Macmillan/Berkeley:University of California Press.
- Giddens, Anthony,1984, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Cambridge:Polity Press. (=2015, 門田健一訳『社会の構成』勁草書房.)
- Giddens, Anthony,[1976]1993, *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies Second Edition*, Polity Press in association with Blackwell Publishers. (=2000, 松尾・藤井・小幡訳『社会学の新しい方法基準』而立書房.)
- Giddens, Anthony,1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Japanese translation published by arrangement with Blackwell Publishers through The English Agency. (=1998, 藤田訳『社会理論と現代社会学』青木書店.)
- Giddens, Anthony ,and Pierson, Christopher ,1998, *Conversations with Anthony Giddens: Making Sense of Modernity*, Polity Press in association with Blackwell Publishers. (=2001, 松尾訳『ギデنزとの対話』而立書房.)
- Lockwood, David ,1964, *Social integration and system integration* ,in G.K.Zollscan and W.Hirsh(eds),*Explorations in social change*. Routledge: 44-57
- Saussure, Ferdinand de,1916, *Cours de linguistique générale*, Paris:Payot. (=1986, 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店.)
- Marx ,Karl, 2017, "Notes on Adolph Wagner's "Lehrbuch der politischen Ökonomie"," Marxists Internet Archive, Pacifica:Organization: Marxists Internet Archive, (Retrieved January 10, 2007,<https://www.marxists.org/archive/marx/works/1881/01/wagner.htm>).
- Marx,Karl,and Engels ,2010, 『フォイエルバッハ論』渡邊憲正訳 大月書店
- Feuerbach, Ludwig ,1967, 『将来の哲学の根本命題』 松村・和田訳 岩波文庫
- Wittgenstein, Ludwig ,2013, *Philosophische Untersuchungen*, Tokyo:Iwanami Shoten,by arrangement with Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main through The Sakai Agency,Tokyo (=2013, 丘沢静也訳『哲学探究』岩波書店.)
- 宮本孝二,1998, 『ギデنزの社会理論：その全体像と可能性』 八千代
- 岡田宏太郎,2000, 「アンソニー・ギデنزの行為理論・社会システム論（四）——政治の概念をめぐる」『名古屋大学法政論集』182:343-385

関口俊之,2002,「A.ギデنزによる相互行為論の再検討：デリダ批判に象徴される理論的混乱」『慶応義大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会との探究』No.55,p.69-69

田邊浩,1990,「A・ギデنزの構造化理論：批判的検討」中央大学文学研究科修士論文（未公刊）